

かながわの 民俗芸能

第85号



浦賀の虎踊り 浦賀虎踊り保存会

神奈川県民俗芸能保存協会

目次

ごあいさつ コロナ禍での民俗芸能

神奈川県民俗芸能保存協会会長 垣澤 勉 3

令和二年度 神奈川県民俗芸能保存協会表彰

. 4

表彰された方々の業績

調査報告

―今も港町に伝わる民俗芸能―浦賀の虎踊り

神奈川県民俗芸能保存協会 金子 隆一 5

会員だより

エンコロ節

茅ヶ崎市郷土芸能保存協会会長・柳島エンコロ節保存会会長 青木 昭三 12

新型コロナによる民俗芸能への影響について感想

白井 正子 13

令和二年の民俗芸能雑記

松岡 敬介 13

新規入会団体会員紹介

海南神社 15

事務局から

令和二年度事業報告、令和三年度事業予定ほか

事務局 15

(裏表紙から掲載)

新型コロナ感染症 緊急アンケート調査結果について

事務局 1

「いさむ」 コロナ禍での民俗芸能

神奈川県民俗芸能保存協会 会長 垣澤 勉

世界中で様々な悪影響を及ぼしている新型コロナウイルスの感染爆発（パンデミック）は民俗芸能に係る諸活動にも、大きなダメージを与えています。我が国においても「緊急事態宣言」が発令され、更に「まん延防止等重点措置」の対策も取られています。次々と新たな波が押し寄せ未だに終息の気配が見られません。先に見通せない状況下、会員の皆様方に於かれましては不安が募る毎日をお過ごしのこととご推察申し上げます。

さて、古来、日本人は、海、山、川などの自然を神として崇拜してきました。にもかかわらず、自然との係わり合いが大切であることを忘れ、近代化の名のもとに人間がしている奥地までの開墾は、一方的に自然との付き合い方を急激に変え、生態系を崩してしまふことの危険を物語っています。今降り注いでいる悪影響は、自然界の生態系にむやみに手を伸ばしていく人間のエゴで巻き起こった悲惨な出来事なのだと思います。

奈良東大寺の大仏殿を建立した聖武天皇の詔に曰く「万代の福業をおさめて、動植ごとく栄えむとす。」全ての動物、全ての植物が栄える世にしたい。人間だけではない。その他の動物も植物も、生きとし生ける物全てが幸せに暮らせる社会、そういうものを実現したい、との思いで大仏を建立されたとのこと。

人類がこの地球の生態系のバランスを考えて行動を起こして欲しいと願っています。

このコロナ禍では、感染防止上、新たな生活様式が提唱され、日常生活においては、「三密」の回避が求められています。しかし、人形芝居を始め多くの芸能団体は、稽古や公演ではどうしても「三密」状態の集団行動とならざるを得ません。更に、構成年齢が高く感染した場合のことを考えると不安が大です。しかし、この様な状況下だからといって民俗芸能の活動の歩みを止める訳にはいきません。ワクチン接種や治療薬が開発され感染が終息状態になることを切に願っています。それまでは、先ず自らの健康と安全を第一に考えて行動することが最善の方法だと思います。そして、この機会にそれぞれの芸能の発祥の意義、役割、活動を根本的に考え直すことも必要かとも思っています。

当協会の活動も一昨年度は協会創設五十周年の節目となり、昨年は新たなスタートを切ろうと思っていた矢先にこのコロナ禍に見舞われました。更に、昨年六月には、当会の会長として牽引していただいた石井一躬様のご逝去され、退任後も様々なご指導を頂いておりましたので大変ショックでなりません。この誌面をお借りし、心よりご冥福をお祈り申し

上げます。

皆様には周知されている「さらめくふるさとかながわ民俗芸能祭」につきまして、協会の大きな活動の目玉となっております。令和元年には十回目の記念大会を無事終了し、再スタートの開催準備を進めてまいりましたが、昨年度の大会は開催を断念することになってしまいました。出演予定団体様には誠に申し訳なく思っております。一年間延びてしまいました。が、今年度は是非とも開催出来まふことを願っております。

更に、年一度の定期総会も書面決議となり、協会表彰者のご披露も出来ず大変残念でなりません。また、三ヶ月に一度発刊する民俗芸能情報は、公演の機会も殆ど無くなり情報収集には至らず休刊となつてしまいました。

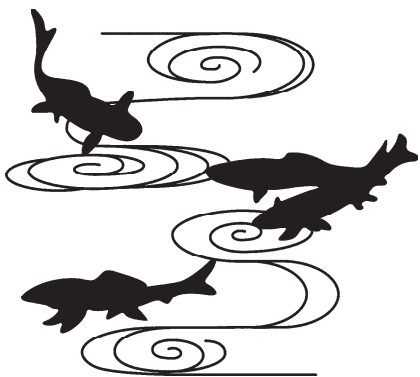
こうした中、コロナ禍での活動状況を把握するため、他県に先駆け協会加盟団体に緊急アンケートを実施しました。その結果、回収率六二・五割の高い回答をいただきました。この数値から、各団体のご苦勞や悩みの深さが伺われ、協会としても団体会員の皆様とのご苦勞を共有出来たかと思えます。尚、アンケートの集計結果は、団体会員は元より、県、市区町村の教育委員会を始め、東京文化財研究所を通じ、全国風流踊連合会を始め他県にも提供し共有されました。

まだまだ新型コロナウイルスとの闘いは先の見えない様相を呈していますが、終息後、再度アンケートを試み、如何にしてこの状態を乗り越えて来たか等々の調査も必要かと思っております。この調

査資料は、今後、同様な事態に陥った場合の貴重な参考資料になるものと確信しております。

最後に、この夏開催予定の東京オリピック・パラリンピックでは、諸外国からの訪日は無くなるようですが、映像や新聞、広報を通じて日本の歴史や文化（民俗芸能等）を発信する大変良い機会になると思えます。このピンチをチャンスと捉え、この課題と難局を乗り越えていくためには、協会会員のご協力は元より、行政的なバックアップと学識経験者のご理解とご協力が不可欠であります。

協会も一昨年、創立五十周年を節目として再スタートを切りましたが、まだまだ「道半ば」です。関係各位のご理解とご協力を賜り、協会並びに各保存会の発展を図るべく努力を重ねていく所存です。尚一層のお力添えをお願い申し上げます。ご挨拶と致します。



令和二年度 神奈川県民俗芸能保存協会表彰

民俗芸能の保存継承と普及活動に対する長年の貢献と努力に敬意を表し、その功績を讃えるため、表彰を行いました。

新型コロナウイルスの影響で、表彰式(総会)を開催しなかつたため、令和二年度は次の二十名の皆様へ表彰状を贈呈させていただきます。(敬称略)

- 永野 しづ子 柳島エンコ口節保存会
- 永野 栄子 柳島エンコ口節保存会
- 三橋 かを里 柳島エンコ口節保存会
- 今澤 久義 柳島大漁船上げ唄好友会
- 青木 詮正 柳島大漁船上げ唄好友会
- 飯原 ヨシ子 長谷ささら踊り盆唄保存会
- 渡辺 かをる 長谷ささら踊り盆唄保存会
- 金井 昭子 長谷ささら踊り盆唄保存会
- 武田 一夫 小田原民俗芸能保存協会
- 向井 信之 小田原囃子多古保存会
- 梅澤 徳夫 台祭囃子保存会
- 杉澤 勉 浦賀虎踊り保存会
- 紙谷 保 浦賀虎踊り保存会
- 平良 豊子 川崎沖繩芸能研究会
- 名嘉 ヨシ子 川崎沖繩芸能研究会
- 安藤 公米子 大平台姫太鼓
- 宇津木 東功 菅獅子舞保存会
- 松原 重代 新城郷土芸能囃子曲持保存会
- 矢澤 博孝 初山獅子舞保存会
- 荒井 久二子 鎌倉市郷土芸能保存協会

表彰者された方々の業績

平成二年に保存会へ入会され、約三十年間、練習と後継者や地元中学生の指導に尽力されました。市の郷土芸能大会など各種の行事に参加され、郷土芸能の広報と継承に努められました。

永野 栄子 様 八十歳
(柳島エンコ口節保存会)

平成二年に保存会へ入会され、約三十年間、練習と後継者や地元中学生の指導に尽力されました。市の郷土芸能大会など各種の行事に参加され、郷土芸能の広報と継承に努められました。

三橋 かを里 様 七十七歳
(柳島エンコ口節保存会)

平成二年に保存会へ入会され、約三十年間、練習と後継者や地元中学生の指導に尽力されました。市の郷土芸能大会など各種の行事に参加され、郷土芸能の広報と継承に努められました。

今澤 久義 様 七十五歳
(柳島大漁船上げ唄好友会)

平成六年に好友会に入会され、市の郷土芸能大会へ出演されるとともに、地元中学校の課外活動に参加されるなど後継者育成に尽力されました。十八年と十九年度には会長を務め、会の発展に貢献されました。

青木 詮正 様 七十三歳
(柳島大漁船上げ唄好友会)

昭和六十二年に発足当時の校友会に入会され、市の郷土芸能大会へ出演されるとともに、地元中学校の課外活動に参加され

など後継者育成に尽力されました。二十一年と二十一年度には会長を務め、会の発展に貢献されました。

飯原 ヨシ子 様 八十五歳
(長谷ささら踊り盆唄保存会)

平成十一年に会員減少の保存会へ入会され、会の存続を支えました。関東ブロック民俗芸能大会等に出演されるとともに、後継者育成に努め、保存会存続に尽力されました。また、保存会会計として、会長を支えて保存会に貢献されました。

渡辺 かをる 様 八十四歳
(長谷ささら踊り盆唄保存会)

平成十一年に会員減少の保存会へ入会され、会の存続を支えました。関東ブロック民俗芸能大会等に出演されるとともに、道具の新調に当たり資料の収集等に尽力されました。また、年長者として会員をまとめるなど、会長を支えて保存会の存続に貢献されました。

金井 昭子 様 七十五歳
(長谷ささら踊り盆唄保存会)

平成十一年に会員減少の保存会へ入会され、会の存続を支えました。歌い手不足時に積極的に担当されるとともに、関東ブロック民俗芸能大会等に出演されました。また、歌い手の後継者育成に取り組み、保存会の継続に貢献されました。

武田 一夫 様 七十四歳
(小田原民俗芸能保存協会)

明治初期頃から始まったが途絶えていた久野囃子の保存会を、昭和五十三年に発足させました。平成二十四年から二十八年には小田原囃子連絡協議会の会長を務め、市内の保存会をまとめて、祭囃子の振興と

発展に寄与され、その後は民俗芸能担当役員として保存継承に取り組みました。二十六年からは小田原民俗芸能保存協会の会計として、会の運営に携わるとともに、後継者育成等にも尽力されています。

向井 信之 様 七十二歳
(小田原囃子多古保存会)

平成十八年から二十二年まで、小田原囃子北ノ窪保存会の世話係として尽力されました。二十一年からは、北ノ窪保存会の子どもたちと笛の習得のため、多古保存会の練習に参加されました。現在も多古保存会の指導者のサポート役として後継者育成に貢献されるとともに、多古保存会の特別会員として、すり鉦の奏者として各種の公演で活躍されています。

梅澤 徳夫 様 七十九歳
(台祭囃子保存会)

台祭囃子は笛、大太鼓、小太鼓、すり鉦を基本楽器とし鎌倉五人囃子として傳承されています。平成十七年から台祭囃子保存会の会長となられ、現在に至ります。湘南子ども祭囃子などで公演を行なわれ、東日本大震災時にはチャリティーライブを開催され、義援金を日本赤十字社へ贈られました。平成三十年からは鎌倉女子大学幼稚部で演奏と体験の指導を行なっています。

杉澤 勉 様 七十二歳
(浦賀虎踊り保存会)

昭和三十四年から四十二年まで小虎及び大虎役を務められ、四十二年からは囃子方(大鼓)を演奏されています。その間、裏方も務められ、用具の管理、補修等で貢献されました。平成十八年からは、保存会役員として会の運営に携わられ、会長を支えま

した。二十三年には東日本大震災で被災した、虎舞で縁のある釜石市への支援に積極的に取り組まれ、指導力を発揮されました。

紙谷 保 様 七十三歳

(浦賀虎踊り保存会)
昭和三十八年に青年会員として裏方に参加されました。平成三年からは、囃子方(篠笛)を担当され、八年からは保存会役員として会の運営に携われ、会長を支えました。

平良 豊子 様 八十二歳

(川崎沖縄芸能研究会)
昭和四十八年に研究会へ入会され、長年にわたり理事を務められ、後進の指導にも貢献されました。県内外で沖縄芸能を広める文化交流活動を続けられました。平成十年から二十四年までは、琉球箏曲興陽会関東支部副部長を務められ、同本部七十周年記念公演に参加されました。そのほか、ロシアやオランダでの海外公演などを行い活躍されています。

名嘉 ヨシ子 様 七十二歳

(川崎沖縄芸能研究会)
昭和五十四年に研究会へ入会され、箏曲興陽会部長などを、また、平成二十六年から現在までは、研究会会長を務められ、後輩の指導や会の発展に寄与されました。川崎沖縄芸能大会を主催されるほか、琉球フェスティバル・イン藤沢への出演など多数の公演を行い、沖縄の文化交流に努められました。また、平成二十六年からは、ボランティア活動として川崎市の特養老人ホームへの訪問演奏を行っています。

安藤 公米子 様 七十歳

(大平白姫太鼓)

平成九年に「山神社奉納芸能」として創作太鼓の「大平白姫太鼓」を立ち上げられ、代表として活動されています。曲の創作や青少年の育成指導を行うほか、箱根駅伝や大平台春祭り、城下町おだわらソーデーマーチなど町内外のイベントに積極的に参加されています。

宇津木 東功 様 六十四歳

(菅獅子舞保存会)
昭和六十年度年から平成三十三年度まで、菅獅子舞保存会の会長を務められ、後継者育成と指導、特に子ども教室における小学生、中学生の指導により地域社会に貢献されました。十一年度から二十七年まで、川崎市民俗芸能保存協会の副会長として会の運営に携わり、会員をまとめ、活動を継続していくために積極的に会長を支えられました。

松原 重代 様 九十二歳

(新城郷土芸能囃子曲持保存会)
昭和四十八年に新城郷土芸能囃子曲持保存会を立ち上げ、郷土芸能の継承と後継者育成のために尽力され、第二代会長、後に名誉会長を務められています。昭和五十八年度から平成十一年度まで、川崎市民俗芸能保存協会の副会長、十二年度から十八年度までは会長を務め、会の運営に携わり、会員をまとめ、活動を継続していくため積極的に保存会を支えられました。

矢澤 博孝 様 七十六歳

(初山獅子舞保存会)
昭和五十年代から、初山獅子舞保存会の中心的存在として、会員をまとめられました。また、将来、保存会を担っていくであろう子どもたちと交流を図られ、後継者

育成にも熱心に取り組まれました。平成十九年度から二十七年には、川崎市民俗芸能保存協会の会長を務め、会の運営に携わり、会員をまとめ、活動を継続していくために積極的に保存会を支えられました。

荒井 久二子 様 八十七歳

(鎌倉市郷土芸能保存協会)

昭和五十一年に御詠歌講の山ノ内支部に入り講師となられ、五十八年から支部長と

— 今も港町に伝わる民俗芸能 —

「浦賀の虎踊り」

神奈川県民俗芸能保存協会 金子 隆 一

三浦半島の先端、東京湾の入り口にある小さな港町、浦賀。京浜急行本線の始発駅ですが、街に往時の賑わいはなく、駅前に船渠跡の大きな建屋が目に入るのみです。

浦賀は、嘉永六年(一八五三)黒船来航の地として知られていますが、約三百八十年前は近海鰯漁業の拠点として、関西四国方面から多くの漁船が集まり湊を覆いつくしたと云います。享保五年(一七二〇)、奉行所が下田から浦賀へ移

転すると、干鰯問屋を中心とした東問屋に加え、西問屋、下田問屋の三方問屋となり、合わせて百軒を超える廻船問屋が誕生、街々は商業の中心地として大いに繁栄していました(註1)。

その浦賀には、国性爺合戦「千里が竹」の虎狩りを題材にした民俗芸能「虎踊り」があります。現在も毎年六月第二週の土曜日に為朝神社へ奉納されています。奉行所が下田から浦賀へ移転した際に

して尽力されました。支部長になられた当初は講師が十二名くらいでしたが、熱心な取り組みにより平成二十三年には三十名にもなり、御詠歌の伝承と発展に貢献されました。現在は会員の減少はあるものの、月二回の稽古や建長寺開山忌奉詠大会、達磨忌奉詠大会などに励まれています。

※内容は、推薦状によるもので、令和二年四月一日現在のものです。

伝えられたと云われ、江戸時代から脈々と今に伝えられています。今も祭礼の他、芸能祭などで毎年演じられており、祭礼の舞台では、活気と共に時代を感じさせる荘厳な雰囲気伝わってきます。古の「浦賀」虎踊りは、どんな様子だったのでしょうか。

現在、「浦賀虎踊り保存会」の虎踊りは、野比「中村町内会虎踊り保存会」の虎踊りと共に「横須賀の虎踊り」として国選択無形民俗文化財に指定されています(註2)。

はじめに

令和元年六月二十五日、浜町町内会館にて町内会長であり、「浦賀虎踊り保存会」会長でもある高畑昌弘さんと共に、江川由雄さんにお話しを伺いました。江川さんは大正十四年一月二日生まれ、数えの九十五才。とてもお元気で、これからも機会があれば、笛を教えたいと虎囃

子の調子を口ずさみながら話しをされてきました。江川さんは、小学校二年生で小虎役となり、昭和八年、湘南電気鉄道（現京浜急行）の品川～浦賀間の直通運転開始（註3）を記念して八月十九日に大津海岸で行われた虎踊り公演（註4）では、小学校三年生ながら小虎を演じました。当時は各世帯の人数が多く、浜町町内会にも大勢の子供たちがいました。子役の和藤内、小虎、唐子になりたい子供たちで溢れていたそうです。二十才からは虎囃子の笛を始めました。戦時中は内地でしたが戦地へ赴き、戻ってから本格的に笛の担当になりました。祖父の江川由五郎さんも虎踊りで活躍され、大唐人を演じた姿が写る古い絵葉書を見せて頂きました。当時の虎踊りは毎年ではなく、四年か五年に一度行われていました。浦賀町役場より発行された大津公演の絵葉書（註5）には、「数年間の中断後に上演された」と記載されています。

江川さんのお話では、

「昔から『虎の胴と頭』は、現在と同じですが、中に入る人間は、祭り衣装と同じ恰好でした。演技を行う場合にも非常に動きやすく、交代もしやすいものでした。現在より演目が多く、演目ごとに交代しながら、数組が演じていました。当時は、虎役の一組が『地』を五つくらい踊りました『地』とは囃子の単位で、『ヨイトセ』までが一つの『地』になっており、同じ調子をいくつか繰り返す事になっていました。虎が屋根の上で演じたという話しが伝わっていますが、町内会館の横に小川があり、その川に沿っ

て幟竿のぼりの小屋がありました。高さも低く長さがあるため、この小屋の上で演じることもありました。踊りには十分な場所でしたが蠟燭の明かりの中、虎の頭の中から外を見ても見通しが悪いため、小屋から落ちることも度々ありました。また、町内会母屋に隣接する消防小屋の屋根も使っていました。

昔、野比で演じられた虎踊りを仲間と見に行った事がありましたが、皆で衣装を見て毛布と言っていた事を思い出します。虎の胴は使用した後、ばらばらにして虫干しをしていました。このばらし方も必ず習ったものです。昔の胴の表部分は麻で出来ており、子供の頃には表面を毛羽立たせる



祖父、江川由五郎さんの大唐人（江川由雄さん所蔵写真より）

ため、麻をむしるようになっていました。大唐人は昔から道化役でしたが、正式に『名取』となっており、祖父も『ブーエ節』を唄っていました。」

平成五年三月に発行された「かながわの民俗芸能 会員活動紹介」では、当時の団体会員が紹介されており、「浦賀虎踊り保存会」代表として江川由雄さんの活動紹介が掲載されています。「虎踊りを維持・継承するための活動を行っています。毎年横須賀市で行われる民俗芸能大会に参加出演。その他外部からの依頼による出演。保存会の総会時、育成等について話し合い、計画をたてています」と語られています。誌面の都合で短い文章になっていますが、江川さんの熱意が感じられます（註6）。

江川由雄さんは、町内会でのお話をさせて頂いた一か月後に急逝されました。もう一度、詳しいお話しをお聞きしたいと思っていた矢先の出来事でした。

ここに江川由雄さんに感謝し、哀悼の意を表します。

高畑会長にご教示頂きながら、今も残る資料から「虎踊り」の姿を追いました。（参考）にさせて頂いた文献は、文中及び末尾に文献名、書籍名を記載させて頂きました）

現在に残された記録

浜町町内会館の中に、昭和三十八年、当時の保存会会長、筑川一郎さんが揮毫された一文が、額に入れられて飾られています。（以下、原文のまま）

虎踊りの由来

一七二〇年（享保五年、二四三年前）十二月二十一日、徳川幕府は下田奉行堀尾岐守に幕命を下し伊豆の国下田奉行所を浦賀の地に移転させた。此の虎踊りは奉行所移転の時下田より浦賀の地へ伝えられたと言われている。以来浦賀奉行所内に於いて、しばしば虎踊りが催されたと伝えられている。その後奉行所大手門前の、川浜町町内会（原文ママ）に移管され、現在は浜町々内会が虎踊り保存会を結成し由緒ある民芸の保存に努力を続けている。奉行所より虎踊りを移管された町内会はそれ以来、他の土地に芸を盗まれないように町内会在住者でもその家を継承する長男長女にだけしか芸は教えられなかったのである。虎踊りは釜石をはじめ九州地方、東海地方と日本各地にあるようだが、いづれも獅子舞程度のものばかりである。此の虎踊りは舞台装置を有し立派な戯曲として演出されている。有名な近松文学 国性爺合戦（正徳五年二四八年前）が原作である。此の虎の頭は弘化二年（一一八年前）に修復されたもので重要文化財である。

昭和三十八年七月二十八日

浜町虎踊り保存会（*当時）

虎踊りが伝来した頃は、奉行所で演じられており、その後、奉行所前の町内会であった川間町内会、浜町町内会へ移管され、そして現在に引き継がれた事が書かれています。

昭和五十二年に浦賀公民館より発行された「古老のはなし」西浦賀四丁目一六

丁目」にある「虎踊り」の中で、小羽島兵太郎さんが次のように語っています。

囃子方だって、下田ばやしって言うんでしょ。だからむこうから来たんでしょ。

(中略)

奉行所に虎方というのがあった。だから、奉行所と一緒に付いて来たんです。その頃、川間浜町と合同でやっていました。川間の虎と言いますよ(註7)。奉行所には、「御船唄役」があり(註8)、同じように「虎方」もあったのでしょうか。また、大正四年に発行された「大禮記念浦賀案内記」に「虎踊」の記載があります(註9)。

虎踊、享保五年下田海關の浦賀に移りし時、下田部屋のもの其地に行われし虎踊りといふものを興行したるが始めにて、爾後西叶神社の例祭にはいつも濱町のもの之を行ひやがて近郷の評判となれり。

ここでは、移ってきた下田部屋(註10)の人たちが虎踊りを始め、やがて浜町の人たちが西叶神社の例祭に演じて、近隣で評判になったことが書かれています。

昭和十九年に日本放送協会から発行された「日本民謡大観 第一篇 関東篇」によれば、NHKのラジオ番組「相模の夕」に虎踊りが出演したことが分かります。解説には次のように書かれています。(一部の旧字、仮名遣いを修正しました)

○浦賀町濱町に享保の昔から伝わっている「虎踊」は重量十貫に及ぶ虎頭座の祭禮の余興には濱町に舞ぶたいが



2人の和藤内と唐子(明治39年の奉納額より)

特設され、其所で演じられた。然しその為めには多大の費用を要する為めこの十四五年來は殆んど演ずることが無かったのを昭和十二年五月七日AK主催で「相模の夕」が横須賀山崎記念館に催された時に音盤だけが奏せされたが、本譜はその録音盤から一部を採譜した。(後略)

AKとは、東京放送局のことで、現在のNHK総合の略号です。この時の録音盤から一部が採譜されたとありますが、残念なことに当時の音源は見つかっていません。最後に出演者が紹介されています。唄と三味線 石川エイ、石渡トク 笛 松本福松、飯田春吉 太鼓 伊勢谷竹治 の諸氏

この文章は古典邦楽研究の町田嘉章氏により書かれています(註11)。

明治時代に書かれた「浦賀志録」第

十一節「叶神社」に記載されている「東岸叶神社ノ船祭及船謡」に続き、虎踊りの内容と歌詞が書かれています。九月の祭礼に関する東西叶神社の祭り唄を掲載しており、「虎踊り」は西浦賀の代表的な芸能として紹介されています。

濱町二虎踊りト云フアリ、ソレハ奉行所ヲ下田ヨリ移シタル当時、町内所員ガ下田ニ行ハレタル祭事ヲ其儘執行スル風俗ナルモ、其理由ハ聞キ漏シタリ布ト麻ニテ総体ヲ装ヒ虎モ布ト麻ニテ纏ハレ頭面ハ木造ニテ牛大二仕上ゲ、二人ノ壮年腹中ニ入り殆ンド猛虎ノ飛舞スルニ似タリ、之ハ普通ノ野台ニ起臥セシムルモ囃子ト野台ノ動クニツレ自然人家ニ近ツケバ猛虎ハ漂然屋上ニ飛上リ其軽キコト、又腹中ノ壮年ノ働キ実ニ驚嘆スル程ニテ其芸能ノ見事ナルハ余程鍛錬ノ効ヲ積マザレバ為ス能ハザルナリ、之ニ附随スルニ和唐内ニ扮スル壮年者アリ、虎ト和唐内ノ立チ廻リヲ見セシムルト共ニ、野台ノ前後ニ少年數十人ハ唐子ニ擬シテ守護シ、野台内ニ八笛・太鼓・三味線ニ合セテ面白キ囃子ニツレテ左ノ謡ヲ唱ヘツツ街道ヲ引キ廻セリ(後略)

奉行所を浦賀に移した際、下田で行われていた祭事をそのまま執行した風俗だが、その理由は聞き洩らしたと書かれています。和藤内は壮年、唐子は少年と書かれています(註12)。

奉納された後、現在は浜町町内会館に飾られている「奉納額」には、明治三十九年九月十五日の日付、和藤内の少年二人、唐子の少女八人の写真、氏名が

書かれています。為朝神社で演じられるようになる以前は西叶神社で演じられていたと言われています。明治末の頃には六月の為朝神社祭礼と九月の西叶神社祭礼、両方で演じられていたのでしょうか。

「浜浅葉日記」は、本家の浅葉家から海浜近くの小田和に分家した浜浅葉家の当主、浅葉仁三郎の日鑑(日記)です。安政五年(一八五八)四月五日に次のような記述があります。

一、今日より三日之間秋谷神明二而御神樂あり、早朝二上宮田より御奉行様・元締様・御掛り様御通り、猶又三日之間正月、早朝二林より宮田・金田・長沢村・久里浜・八幡・久比里・川間迄の神輿通行、本家兄・年寄・百姓代・日野屋・先生外鎌くら式人・判頭・役人足替り替り参、日野屋は仕舞迄此方二泊り、(中略)

一、八幡内川新田之者参り、酒料として金巻歩遣、虎頼遣ひ候、尤、惣右衛門殿内かり候、夕方二仕舞二成、

四月五日ですが正月となっているのは、「取り越し正月」のことでしょうか。村や家族に悪いことがあった年には、年の途中であつても年始の正月と同じように行っていました。身内に面倒が起こり、異国船の来航が続くなど、嘉永五年のペリー来航のあと、世は騒然とし、この年には安政の大獄が起こっています。

「八幡内川新田之者」と書かれていますので、不幸を打ち払うため、天神社の虎踊りと呼んで賑やかにしたのでしょうか(註13)。「久里浜懐古」の中では「内川虎踊りは大正十五年(昭和)の始めで途絶え

てしまった」と古老が語っています(註13)。今でも天神社には「虎の頭」が残されており、当時が偲ばれます。浦賀の虎踊りとの関係はどうだったのでしょうか。

「新訂 白井家文書 第三卷」には文久二年(一八六二)七月、西浦賀で虎の見世物があった事が書かれています。浦賀の人々が生きた虎を初めて見たことになりました(註14)。

(前略) 珍しき事故記置、同廿日右虎之儀、浦賀三而四日之間諸人江見物為致度段、西浦賀名主の御番所江願書差出候二付、御役宅江伺二相成候処、御間濱町の人々も生きた虎を見ることで、本物の表情と動きを知ることになりました。海外からの情報に限られていた時代にも関わらず、西浦賀の人々は幸運にも虎を見る貴重な機会に恵まれた事になります。

虎踊りはいつ浦賀に伝わり、始まったのか

浦賀に関する古文書、書物の多くは、浦賀奉行所に関連する公式記録が多く、特に異国船来航、ペリー来航については複数の記録が残っています。しかし、当時の民俗、特に民間の芸能を記録したものは少なく、限られた文献により語られてきました。虎踊りの伝承について「神奈川県民俗芸能誌」によれば、奉行所が下田から浦賀へ移った際に伝えられたという通説に対し、古文書などの資料、記録は無く、唯一、虎頭を収納する木箱の蓋裏に「弘化二年九月吉日 於角長部屋虎修覆ス」と墨書きが残されている事から、弘化二年(一八四五)に浦賀奉行の声がかかり下田から取り寄せたのが最初

だとしている(註15)。

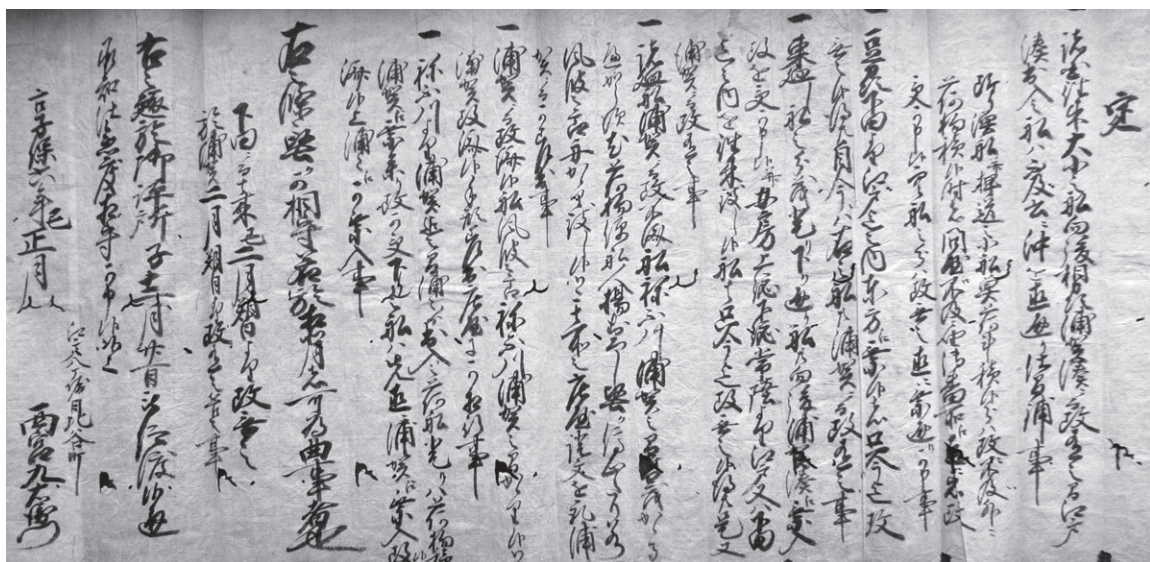
享保五年(一七二〇)に奉行所が浦賀に移転したことが、契機になった事は間違いないと考えられますが、はたして傳來時期、経緯はどうだったのでしょうか。昭和六十一年発行の「かながわの民俗芸能」第42号に、当時の「浦賀虎踊り保存会」会長であった白井太一さんが「浦賀虎踊りの沿革」と題する考察を寄稿されています。

「最近、下田伊勢町から見つかった巻物に、浜町に残る虎踊りの記載があった」
「原文によると『相州浦賀濱町ヨリ頼有て町内浦賀詰合旁々同虎を作り遣い形秘美を委く傳授す』とあり、本元の下田の虎踊りが大川・小稲・浦賀に伝授され、浦賀には天明(一七八一〜一八九)の頃に伝わったのではないか」との考えが掲載され、弘化二年の傳來説とは違う見解を述べられています(註16)。同じく平成二十七年発行の「かながわの民俗芸能」第79号では、横須賀開国史研究会会長の山本詔一さんが「浦賀虎踊りの由緒」と題する小論の中で「天明・寛政期(一七八一〜一八〇〇)に伝えられたと思われる」との考えを示されています(註17)。

「編年 下田年中行事」によると、享保五年(一七二〇)十一月に卒然と御番所が浦賀へ移ることとなり、下田問屋は浦賀へ通勤するようになった。この時、「浦賀問屋共不案内につき諸事引き廻すように申し渡される。享保六年一月に浦賀役所御目見えのとき、下田問屋は先であったが、三月節旬では浦賀問屋共が上席になった(註18)。この頃は、浦賀の問屋

との関係もまだ落ち着いていない様子が書かれています。当時、奉行所は「御役所」と呼ばれていました。

白井太一さんも参考にされた下田伊勢町に残る竜虎の記録「永続虎之巻」は、



奉行所の浦賀移転を知らせる書付

弘化二年に書かれています。詳細は静岡県教育委員会が平成二十二年に発行した「国記録選択無形民俗文化財調査報告書 小稲の虎舞」に掲載され、全文を見る事が出来ます(註19)。

下田八幡神社の祭祀に伊勢町が出した俄練り物の由来から歴史、練り物寸法までの記録であり、浦賀の虎踊りに関する記録がある古文書です。この報告書に掲載されている翻刻から浦賀に関する箇所を抜き出し、傳來時期を考えます。

永続虎之巻 (下田伊勢町所蔵)

抑当街鎮護御祭礼之節我等町内若イ者共相企街方江持歩行興行至シ俄ねり物龍虎の来由を尋に昔年慶安の頃何人の作にや当時八木ノ翁是不覚就中天明の頃池之町大川屋何某之東浦大川村江故有て是を譲ル尚其後南小伊奈村江當時式守国八是を譲りあたふ此訳同村出生江戸大相撲行司役相勤ル式守猪之介蝸牛の弟子与なり式守国八与名乗田舎に類なき行事也此国八師の古郷ゆへ小稲村江折節立越又縁を以無躰の懇望難黙止依而虎を作り授与す猶相州浦賀浜町ヨリ頼有て町内浦賀詰合旁々同虎を作りけり形秘美を委く伝授す(中略)

※抑：…そもそも
※就中：…なかんづく、とり

わけ

慶安年間（一六四八～一六五二）に祭礼行列の出し物（にわかねりもの）として龍虎が作られ、天明年間（一七八一～一七八九）に池之町大川屋の者が東浦大川村（現静岡県賀茂郡東伊豆町大川）に縁があり虎を譲った。池之町は伊勢町の隣町であり、縁があったという大川屋は、幕末に横浜弁天通りに移転した下田問屋の一つでしょうか。安政六年（一八五九）横浜への移住を希望する嘆願書に大川屋善兵衛の名があります。

その後、行司である式守国八の師匠、式守猪之介（伊之助）の故郷である南小伊奈村（小稲村）からの望みを断わることなく、虎を作り授与した。相州浦賀浜町からも頼りに依頼があり、町内の浦賀詰合の人々が虎を作り、形、秘、美を詳しく伝授した事が書かれています。「町内浦賀詰合旁々」と書かれている「詰合」は、町内（伊勢町）から浦賀に出張し、詰めていた人たちのように思われるが、これでは浦賀で虎を作ったことになりません。やはり下田伊勢町で浦賀に関わる方々がいた詰合で作られたという意味でしょうか。浦賀に奉行所が移ってから下田には「下田御用所」が残り、浦賀奉行所から同心二人が派遣されており、下田と浦賀の間を定期的に行き来していました。また浦賀には東問屋、西問屋の他、移ってきた下田問屋も多くあり、三ヶ所の「問屋會所」が番所の両側にありました（註20）。奉行所の与力など勤める者も下田出身者が多く、頻繁に往来があったことが想像できます。「東浦大川村」「南

小伊奈村」「浦賀浜町」の三か所に伝えられた事が書かれています。東浦大川へ伝えられた「その後」と書かれています。小稲と浦賀へ伝えられたのはいつの事でしょうか。さらに次のような記載があります。

（中略）

于時文化元子極月大火三龍虎の諸道具不残焼失々清次新作井垣附太鼓台大安寺太子堂に焼残りは太鼓台元祖言伝町什物なんてん桐小つゝみ是は綿伝土蔵ニおゐて焼残る依之同五年卯五月末方国八安右衛門常吉龍計早急に拵上げ六月四日ヨリ街方江持歩行興行す浦賀浜町ニも初発より三三度目に出し虎は大工町七郎兵衛方町内田畑要右衛門方江来ル排名津間云ふ仁是を作る其年千代井登名安申唐人踊立見平右衛門今草川氏の伯父也江府堺町中村勘三郎座ニ而古人坂東の三津五郎排名秀桂七変化所作ニ而此の唐人踊工風し而大当り立見氏覚へ来て於浦賀是を付ける同九申の年町内にて式守国八かじや常吉焼失の虎を再作して則龍虎とも興行いたす（後略）

※于時……ときに

文化五年（一八〇八）には式守国八、安右衛門、常吉が急ぎ龍を作り復興させ、六月四日に興行をした。浦賀で初回から三三度目に出した虎は、大工町の七郎兵衛方より、伊勢町の田畑要右衛門方に来た者が作ったと書かれています。大工町は伊勢町より南側、海沿いの町です。「排名」と書かれているのは排名、号の事です。この箇所の意味は、「津間」と呼ば

れた人が、「初期の虎を下田伊勢町で作った」という意味でしょうか。

その年、千代井登名安と云う唐人踊りがあり、立見平右衛門が江府堺町（現在の日本橋人形町）の中村（勘三郎）座で、三代目坂東三津五郎である秀桂（秀佳）が歌舞伎舞踊の七変化に唐人踊りを取り入れ大当りした。立見氏は、この唐人踊りを覚え、浦賀において是を付けた（取り入れた）と書かれています。

秀佳は、寛政十一年（一七九九）に三代目坂東三津五郎を襲名、天保二年（一八三二）に没しています。唐人踊りは「江戸の舶来風俗誌」によれば、看看踊（カンカン踊）という清国の踊りを長崎に伝えたもので、文化年間（一八〇四～一八一）に京阪江の三都をはじめ諸方で流行したとなっています（註21）。月琴、提琴、胡弓などさまざまな楽器の演奏に合わせて、歌い踊ります。歌は「かんかんのう」と言われ、その歌詞のはじめの一節は「看看（カンカン）兮賜（エエスイ）：」となっています。この頃、江戸で唐人踊りが大いに流行っていた事が知られています。

その後、飢饉の年に祭礼道具が鼠にこじられたので、鍛冶屋常吉と塩崎久兵衛は、弘化二年（一八四五）に再び虎を修造した。この時に、後世のために寸法と材料を記し、次に作る際に活用できるように「永続虎之巻」を書き残すと記載されています。浜町町内会館に残る虎頭の木箱、その蓋裏に残る墨書きにある「弘化二年九月吉日」の日付との関連はどのようなのでしょうか。

浦賀の虎踊りの伝来には、下田問屋が大きく関わり、奉行所移転から少し時間が経ち、問屋の商いも落ち着いてきた頃、天明年間（一七八一～一七八八）から寛政年間（一七八九～一八〇一）に伝わったのではないかと思われます。当初は奉行所に詰めていた人々により演じられ、後に奉行所前の川間、浜町町内会に引き継がれました。国性爺合戦の初演は、淨瑠璃が一七五五年、その翌年に歌舞伎の上演があり、伝わった当初より和藤内が虎を退治する歌舞伎と同じ姿となっていたようです。そして、文化五年（一八〇八）頃には、現在の形に近い唐子踊りが加わったと思われれます。

江戸時代後期の「浦賀」のまち

「浜町」の様子

虎踊りが伝わったとされる一七二〇年から一八〇〇年代なかばの浦賀はどんな様子だったのでしょうか。

「浦賀中興雜記」は、西叶神社の宮司を務めた感見宗之助氏が、明治中頃に編集したとされる江戸初めから明治中頃までの記録です。この中に「西浦賀地名由来の事」と題する項に

「享保五子年以前にハ田中廿七番地は入江葭原にて」と浦賀奉行所が出来る以前、西叶神社より西側には大きな集落が無かった事が記され、「享保五子年以前は何れの浦賀の帳簿にも田中・宮下・蛇畑ヶ・浜町と云う小字ハなし。近頃の字名なり。」とし、浜町という地名はなかつた事が記されています。また、「浜町ハ川間の岡と云うより始めり」とし、「次第に

岡より出てきた人と他所より人が或ハ他より人入来り浜通りに家を建て住居せしを浜町と云ふよしなり。岡有てこそその浜町の名有り是道理なり。」として奉行所が移転、西浦賀に廻船問屋が出来て以降に繁栄していったことが分かります(註22)。

寛政十二年(一八〇〇)七月から文化三年(一八〇六)に七年の年月をかけて編集された五街道分間延絵図(五海道其外分間延絵図並見取絵図)に所収されている「浦賀道見取絵図」を見ると、与力町、同心町と思われる街並みに続き、海沿いには百軒を超える浜町の家々が描かれています。そこには地藏堂があり、その横には小川が書かれています(註23)。

弘化四年(一八四七)の「浦賀紀行」には、奉行所前にある「与力町」「新与力町」の町名の他、「麴町」「通り町」「田町」「中町」とありますが、これらの町名は「同心町」の事でしょうか。そして一番海側には「濱町」と「地藏堂」が並ぶように描かれています(註24)。

明治四十年に発行された「浦賀町郷土誌」の漁業の項では、「鴨居、久比里、走水、浜町の殆ど全部、大津、川間の一部分其業に従事す」とあり、「明治廿一年十二月の調査」から漁業従事者は増えておらず、造船職工に転業する者が多いためと書かれています(註25)。浜町が出来てから明治中頃までは、漁業が中心であった様子が分かります。また、明治末の字別戸数を見ると浜町は、百四十二戸になっており、この頃には、浦賀の中では大ヶ谷、田中に次ぐ規模となっていました。浦賀奉行所の移転先候補地は、二転三

転しました。東浦賀、西浦賀田中一带は干鯛問屋などから反対され、最終的に川間の奥地に決まりました。川間には奉行所とともに移ってきた与力、同心の住まいがあり、職人など、その他の人たちが海近くに住み、浜町を形成、発展していきました。川間に奉行所が置かれてこそ、浜町に虎踊りが伝わったこととなります。虎踊りが奉納される為朝神社

西岸浦賀の鎮守である西叶神社の「浦賀西岸 叶神社誌」には、次のような記載があります(註26)。

「西浦賀四丁目(旧浜町)に叶神社の末社の為朝神社と云う小祠がある。『新篇模国風土記稿』に『疱瘡神』と記され、祭神は史上有名な鎮西八郎源之為朝と云う。周知のごとく、源為朝は保元元年(一一五六)の所謂保元の乱に父源頼義と共に平清盛と戦って敗れ、為朝の強弓を恐れた勝者側によって腕の筋を斬られ、伊豆の大島に遠流に処され、悲惨な流人生活の果て、赦されることなく、島で歿した武将である。」(中略)「この為朝神社も為朝の御霊を祀ったものであり、その御霊の力をもって、当時、非常に恐れられた疫病のひとつである疱瘡の災いを救って呉れる神と云う信仰が、この為朝神社も神霊に期待されていたのであろう。『疱瘡神』と称されていたのは、このようなことによると考えられる。この為朝神社にて於いて、毎年九月十五日、叶神社の祭礼の時、虎踊りと云う芸能が演じられて来た。現在では、必ずしも



地蔵尊、説教所の御札

祭礼の日ではなく、六月中旬の為朝神社の祭礼や、神奈川県民俗芸能大会等で演じられ、その所要時間は、約五分程である。」

浦賀公民館編集の「古老のはなし」では小羽島兵太郎さんが「浜町は漁師が多かったですね。今の浜町の町内会館のところに説教場というのがあって、西の一般の人達が用のない時はごろごろしていました」と語られています。現在の浜町町内会館の場所は、元々「子育・身代地藏尊」であり、「説教場」があった場所でした(註27)。一八〇〇年頃に海上で発見された為朝像が一八二〇年に為朝神社が創建されるまで、この地藏堂に安置されていました。「浦賀紀行」には次のように書かれています。

地藏堂 濱町にあり堂中に源為朝朝臣の神像を安置す昔此町の者海上にて難風にあひしに船の邊に光るものあり怪て取帰るに為朝「臣の神像なるによりこゝに祭るといふ(註28)。

また、浦賀志録では次のように書かれています。

川間ト浜町ノ間ニ地藏堂ト為朝神社ナ

ルモノアリ、其来由ナルモノヲ開クニ寛政十二年西浦賀村住民高橋忠兵衛ガ一日海上ニ漁事シ居リタルニ沖合ニ木像ノ浮漂スルヲ見、不審議ニ思ヒテ舟ニ寄セ、曳キ寄セ携工帰リテ町内ノ地藏堂ニ安置シタリ、後衆人之ヲ敬崇スルモノ多ク像ニ補修ヲ加ヘシニ始メテ為朝ノ像ナルヲ覚知スルニ至リ、文政三年六月浦賀奉行筑紫佐渡守ノ許ヲ得テ堂宇

二納メテ町ノ鎮守トナス、其月ヲ以テ祭事ヲ行ヒ引続キ今日ニ至レリト(註29)

ここでは、為朝神社の縁起が書かれています。寛政十二年(一八〇〇)、高橋忠兵衛という漁師が漁の最中に海上を漂う木像を見つけ、地藏堂に安置して多くの人々から崇め敬われました。修理をする際、初めて為朝像であることが分かり、文政三年(一八二〇)六月、当時の浦賀奉行筑紫佐渡守の許可を得て勧請創立、堂に木像を安置し鎮守とした。その月(六月)に祭礼を行うことになり、今日に続いています。

昭和から平成、そして令和へ

昭和五十三年に発行された「横須賀風物百選」(註30)の中で、当時の保存会会長であった筑川一郎さんが次のように語られています。

いつだったか、古老からこんな話を聞いた。「昔はこんな稽古ではなかった。笛、太鼓、三味線、虎、踊り子、皆それぞれ別の場所で稽古を受けたんだ。そして本番の日の二日前を総ざらいと

決められてあった。勿論、総ざらいにはびったりと調子が合ったもんだ。四年に一度くらいしか出さなかった昔は、祭りに虎踊り出すことが決まってから練習を始めるんだ。だから踊り子や虎使いはいつも新人の方が多いよ。今みたいに毎年同じ人がやってねえよ。」娯楽の少なかつた昔は、他町内に虎踊りが流出しないように長男や家付き娘にしか囃子を教えなかつたと聞いている。

このように当時は、祭礼が一大行事であり、多くの子供たちが参加を希望していたと云います。衣装の大きさも限定されているため、唐子になりたくても決められた学年で抽選に外れると二度と機会はありませんでした。また、多くの男の子が希望した和藤内役は、衣装も自分で用意したと云います。皆の憧れの役だったのでしよう。昭和の活気ある光景が目に浮かんできます。

現在は、多くの民俗芸能が後継者不足に悩み、長く続けられてきた芸能の将来が心配されています。そんな中、今も「浦賀の虎踊り」は多くの人々に支えられ、守り続けられています。新しい時代に向かつて、形は少しずつ変化しながら、末永く続いていく事でしょう。

古い虎の皮などは、今でも残っており、境内にある保存用の小屋には、古くから残る多くの資料と共に、古い道具類も保管されています。江川さんは、三味線、笛、唄の調子を書いた浜町虎踊保存会発行の「三味線之部」と題する冊子もお持ちでした。「横須賀の虎踊り」は、文化庁により「国選択無形民俗文化財」として指定されており、行政による記録作成が必要とされ

ています。多くの資料が残る今こそ、一刻も早く調査が開始されることを期待し、この項の最後と致します。

改めてご協力いただきました皆様にご礼申し上げます。

引用させて頂いた資料、文献

- (註1) 高橋恭一『浦賀奉行』 學藝書林 一九七六年 二十七ページ
下田から移転する奉行所の候補地は、干鯛問屋などの反対があり、東浦賀及び西浦賀田中一带の案は白紙となり、新たに川間の奥地を候補地とした。もし町民の中に廻船問屋の営業を希望する者がいれば認める事とした。廻船問屋は、船宿の他、積み荷の保管やその品物の売買の委託を引請ける商人であり、船宿、倉庫業、売買代理業を兼ねていた。下田問屋六十三軒、西問屋二十二軒、東問屋十九軒となり、三方問屋と呼ばれた。
- (註2) 文化庁 文化財オンライン <https://bunka.niac.jp/heritages/detail/208960>
国選択無形民俗文化財とは、記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財(註3) 京浜急行電鉄株式会社『京浜急行90年史』一九八八年 一六七ページ
- (註4) 浦賀町役場 無声映画『浦賀郷土舞踊 虎踊実況』一九三三年 字幕より
- (註5) 浦賀町役場 絵葉書『相州浦賀名物 虎踊』一九三四年 解説より
- (註6) 神奈川県教育庁生涯学習部文化財保護課『かながわの民俗芸能 会員活動紹介』神奈川県民俗芸能保存協会 一九九三年 四ページ
- (註7) 横須賀市浦賀公民館『浦賀地区

古老のはなし』一九七七年 六十七ページ(昭和四十六年五月二十六日 於浜町町内会事務所)

(註8) 横須賀市『新横須賀市史 通史編 近世』二〇一一年 一三三ページ

(註9) 職員懇談話会(浦賀小学校)『大禮記念 浦賀案内記』信濃屋書店 一九一五年 六十五ページ

- (註10) 日本放送協会事務局編『日本民謡大観 第一篇(関東篇)』日本放送協会 一九四四年 三七〇ページ
- (註11) 加茂元善『浦賀志録』一九〇九年(明治四十二年) 浦賀志録刊行委員会『浦賀志録(上)』横須賀市二〇〇二年 一四五ページ 三浦古文化編集員会『三浦古文化第十七号』三浦古文化研究会 一九七五年 八〇ページ
- 高橋恭一『浦賀志録(四) 上巻ノ二』(註12) 横須賀史学研究会『相州三浦郡大田和村浅葉家文書第三集 浅葉日記(三)』横須賀市立図書館 一九八二年 二六六ページ
- (註13) 久里浜地域文化振興懇話会編『久里浜懐古』久里浜地域文化振興懇話会 一九九一年 二九二ページ
- (註14) 横須賀史学研究会『新訂 白井家文書 第三巻』一九九八年 七十七ページ
- (註15) 永田衡吉『神奈川県民俗芸能誌』錦正社 一九六八年 三四四ページ
- (註16) 白井太一『浦賀虎踊りの沿革』(かながわの民俗芸能 第42号) 神奈川県民俗芸能保存協会 一九八六年 三三ページ
- (註17) 山本詔一『浦賀虎踊りの由緒』(かながわの民俗芸能 第79号)

神奈川県民俗芸能保存協会 二〇一五年 十四ページ

(註18) 下田市教育委員会『下田年表 第一集 編年 下田年中行事』一九九〇年 一〇〇ページ

(註19) 静岡県教育委員会文化課『静岡県文化財調査報告書第六一集 国記録選択無形民俗文化財調査報告書 小稲の虎舞』二〇一〇年 一五八ページ

- (註20) 蘆田伊人 圭室文雄『大日本地誌大系 新編相模国風土記稿 第五巻』雄山閣発行一九九八年 二九六ページ
- (註21) 小野武雄『江戸の舶来風俗誌』展望社発行 一九八一年 二二二ページ
- (註22) 浦賀古文書研究会編『浦賀中興雜記』浦賀古文書研究会 一九八一年 三十七ページ、三十八ページ
- (註23) 児玉幸多監修『浦賀道分間延絵図 全一卷』東京美術 一九七七年 濱町付近
- (註24) 富谷忠良『浦賀紀行 完』(内閣文庫 国立公文書館所蔵) 一八四八年
- (註25) 小川鎌太郎『浦賀町郷土誌 全』浦賀実業家同志会 一九〇七年 一二二ページ 復刻版 横須賀郷土資料復刻刊行会『横須賀郷土資料叢書 第二輯』一九七九年
- (註26) 感見彦治(菊池武 改定編集)『浦賀西岸 叶神社誌』叶神社 創建八百年祭実行委員会 一九八一年 一二二ページ
- (註27) 石渡 正『校訂 三浦郷村寺社略縁記 茅山文庫 一九八〇年 四ページ』(註28) 横須賀開国史研究会『横須賀

開国史シリーズ2 三浦半島見聞記』
横須賀市 一九九九年 八十ページ

『浦賀紀行 完』

(註29) 浦賀志録刊行委員会『浦賀志録
(上)』横須賀市二〇〇二年二二二ページ

(註30) 横須賀市教育委員会『横須
賀風物百選』横須賀市 一九七八年

一一二ページ

参考にさせて頂いた資料、文献

・川本真由美(横須賀市教育委員会教育
指導課)『内川の虎踊り』(かながわ
の民俗芸能第77号) 神奈川県民俗芸能
保存協会 二〇一三年 十一ページ

・久里浜天神社ホームページ 天神社
由来近世の内川新田民家・道路絵地図
<http://www.tenjusha.or.jp/>

・神奈川県図書館協会、郷土資料編集委
員会『神奈川県郷土資料集成第十三輯
神社明細帳 三浦郡』神奈川県図書館
協会 一九九八年 七十九ページ(原
本 明治十二年 神奈川県横須賀市若
松町 諏訪神社所蔵)

・横須賀市『新横須賀市史 資料編 近
現代I』二〇〇六年

・明日の浦賀を作る会『浦賀のまつり』
一九八八年

・Kabuki on the web 歌舞伎演目案内
『国性爺合戦(コクセンヤガッセ
ン)』[http://ennokudb.kabuki.ne.jp/
repertoire/1802](http://ennokudb.kabuki.ne.jp/repertoire/1802)

・横須賀文化財協会『図録 横須賀の文
化財』一九七二年 八十三ページ

・横須賀市教育委員会『横須賀市文化財
総合調査報告書 第一集 浦賀地区』
一九八一年 三七五ページ

会員だより エンコロ節

茅ヶ崎市郷土芸能保存協会会長
柳島エンコロ節保存会会長

青木 昭三

エンコロ節は寛永年間(一六六一〜
七三)の頃より港湾の作業に従事する海
の男たちが謡った唄です。出船入船の際
に風待ちしている船が海路の無事息災を
祈り、また祝って船の炉を囲んで酒を酌
み交わし唄われたものと伝えられてい
ます。また年始、祝言、上棟式(建て前)
などの祝いの席にも唄われていました。

柳島には江戸時代の末まで、相模川の
入り江を利用した港があり、江戸やその
他の土地との物の輸送に携わっていまし
た。当時の柳島村は相模川河口の東側に
あり、現在の柳島一、二丁目、浜見平、柳
島海岸、柳島の範囲です。昔は地元で



柳島エンコロ節保存会 (2014かながわ民俗芸能祭)

は柳島一、二丁目を「本村」、柳島海岸を
「河岸」または「浜前」と呼んでいました。
『新編相模国風土記稿』には千ノ川(松尾
川)が村の東から南へ流れ、西には相模
川と古相模川の二つの流れがあり、南は
海と記されていることから、島のような
地形であったことが想像されます。

さて、「柳島湊」のことも風土記稿にも
記されています。四百石積みの船が三艘、
それより小さい船が四艘あって、近くの村
の米や麦をこの湊から出した、とあります。

柳島湊は寛永年間のころは「須賀柳島合
湊」としていましたが、相模川の流路が柳
島側に移ったことから、村は廻船業務の拡
大を幕府に願いました。ところが須賀村
(対岸の平塚)からそれは困るという意見が
出て、湊の運営権をめぐる両村の争いとな
りました。そして元禄四年(一六九二)、幕
府の裁定で須賀村と同等の権利が柳島湊に
も認められました。

その昔、物資は陸路馬で運んでいました
が大量には運べません。そこで相模の国で
は相模川を下ってきた物資(主に年貢米)
は個々で廻船に積み替えて相模川をさかの
ぼりました。そういう理由で、柳島湊は江
戸時代を通じて栄えたのです。

さてエンコロ節の話に戻りますが、エンコ
ロという言葉の意味は分かりませんが、歌の
中の囃子言葉からきていると言われていま
すが、囃子言葉は柳島もそうであるように、

多くはヨイサラ ヨイサラ、あるいはそれ
に似た言葉です。節回しはゆつくりとした
テンポで、唄うのに大変難しい唄です。

その分布をたどってみると市内では柳
島だけに伝えられた民謡ですが、県内では
三崎港にあったことが分かっています。
神奈川県より東のほうには少なく、有
名なのは宮城県海岸地方のエンコロ節
です。節回しは柳島のものとは違いますが、
船おろしに唄われる祝歌だそうです。
西のほうでは、伊豆の西海岸の戸田にヨ
イコノ節と言われているものが同じです。
船おろし、氏神祭、年始などの席で唄わ
れる祝い歌で、歌詞は柳島のものと同じ
です。さらに西のほうへ行けば三重県
和歌山県の海岸部、それに四国の各県の
海岸部にたくさん唄われています。そし
て、これらの地方に共通することは、ど
こも港町であるということです。

エンコロ節は代々それぞれの家で口伝え
されてきました。結婚式や上棟式などの祝
いの席で唄われてきましたが、湊がなくな
り、だんだん唄う人が少なくなり、一部の
老人有志の唄になってしまいました。柳島
地区では何んとかこの唄を末長く残したい
という思いから昭和四十八年に「エンコロ
節保存会」を結成しました。その後、幼稚
園児や小学生の後継者を加えました。現在
は子供の入会者はなく、成人男性十七名、
女性六名、計二十三名で毎月第二日曜日の
午後七時より午後九時まで柳島自治会館で
練習しています。

昭和五十一年一月二十二日エンコロ節は、
茅ヶ崎市の重要無形文化財に指定され現在
に至っております。

会員だより 新型コロナウイルスによる民俗芸能 への影響について感想

白井 正子

初春に行われる年占い祭事は、機関誌「かながわの民俗芸能」保存協会の調べから選んでいる。信頼できる情報として利用させて頂いている。

昨年は小田原市にある白髭神社で行われる奉射祭に出掛けた。第八十四号の会員だよりに行事の様子を載せる。年頭であったので新型コロナウイルスの影響は始まっていない頃である。

当日の早朝に地元の人達は氏神を祀る神社に集まり、旭日の昇る時刻に合わせて的に向い弓矢を射る祭りが始まるのを待つ。人々の見守るなかで年占いが行われる。本年の予想は天下泰平に合わせ五穀豊穡という発表を聞いてから、初詣



昨年の武射祭の様子

を済ますと新年がこれから始まる慣習の環境は、この地域に住む人々の生活のなかに継続されているようである。

しかし、コロナ禍が終息しない本年では二月に入ってから、第二回目の緊急事態宣言が出されている状況下にある。昨年は文化財課に携わる人達も奉射祭に見えて民俗芸能への関心を示されており、本年も参詣される話を伺っていたので、私も出掛けようと思っていたが、コロナ感染症の流行は収まらないために人々の集まる祭事は中止する事態に余儀なくされて、日常生活にも万事が難しくなった。「新型コロナウイルス感染症 緊急アンケート調査結果について」当民俗芸能保存協会が行った調査期間内に八十八団体の内、五十五団体からの報告を読んでみる。

アンケートから保存会として民俗芸能の活動に関する項目で挙げた多い事情をみると…今年の公演、奉納活動は全く行われなかった。稽古は完全に中断している。今年の公演、奉納活動は中止する予定である。保存会の現状にどなたか（宮司、祭礼世話人、僧侶）に相談をしている等が挙げられる。

新型コロナウイルス感染症の対策が、今後の活動のためにも必要だと考えていること、保存会として民俗芸能の活動を自粛している実情が回答に表れている。

保存会の人達の活動への自粛について感染症予防に負けないためにも、食生活

や生活のリズムに影響している栄養やエネルギーの摂取と消費とのバランスは良好に保つように、自粛は体重の変化に反映させる、という報告を挙げて措きたい。民俗芸能保存会の活動が自粛している期間中を利用して衣類、道具、演目の記

会員だより 令和二年の民俗芸能雑誌

松岡 敬介

言うまでもない。令和二年、二〇二〇年は、人類史上に記憶されるだろう。日本史のみならず世界史の年表に必ず記載されるはずだ。だから、考えようによっては、私たちは歴史的な現場に立ち会った一年だったのである。

そのように捉えても、やはり、祭りの無い令和二年は異様な一年であった。戦時中でもないのに、これほど一斉に中止されてしまった年は無かつただろう。それほど、コロナ禍は強烈なものであった。

思い返すと、コロナウィルスがクルーズ船内で感染拡大し、連日ニュースで流れ始めた頃、ちょうど二月だったが、優れた民俗研究者でもある筆者の友人から彼が運営に携わる民俗芸能イベントに招待して頂いた。そこでカメラを提げてノコノコと出掛け、打ち上げにまで割り込んで呑気に飲んでいたのであるが、この時この疫病がここまで深刻な問題になってしまおうとは想像もしていなかった。なにしろ、この後一か月も経たないうちに、世の中は打って変わったように自粛一色になってしまった。

そのような時勢の中、十一月に平塚市で「第四十四回ひらつか民俗芸能まつり」

録や映像を整理し、記述にして維持と保存に残す作業は、その地域の口承や伝承を伝えて存続する民俗芸能者の細やかな伝統芸能を伝えるには、是非とも必要なことと考える。

が開催されることを知り、早速申込、見学に出かけた。

十一月十五日の開催を迎え会場に到着すると、この日は「湘南座」結成三十周年記念公演も兼ねていたので、入場制限された会場の中央公民館は、関係者や来賓で予想以上の人が出た。

さて、ここで当日の会場内の感染対策について触れておきたい。入場時のチェックはもちろん、座席は一席ずつ間隔を空け、上演中も換気のため扉を開放、幕間の都度、スタッフが念入りに座席や手すりを拭いて回っていた。また、太夫と三味線が正面右手の高座に控えるが、この両師匠の前の一区画を着席禁止とした。飛沫感染防止という事だろう。当然だが、太夫も三味線もフェースシールドは着用していなかった。

このように、あらゆる場面で感染対策に万全を期そうとする姿勢が伝わってきた。スタッフの皆さんも大変だったと思う。

民俗芸能まつりの参加団体と上演内容も簡単に紹介したい。まずは、高浜高校文楽部による「寿式二人三番叟」。舞台を清める三番叟だが、コロナウィルスが撒き散らされた世の中も清めて欲しいも



湘南座「傾城阿波の鳴門」



高浜高校文楽部「寿式三番叟」

のだ。
次は湘南座による「傾城阿波の鳴門」のお馴染みお鶴である。人形芝居を代表



前鳥座「艶容女舞衣 酒屋の段」

するかのような演目だが、一人遣いはまた違った趣がある。ついにながら、高浜高校文楽部と湘南座は共に一人遣いの人形芝居である。三人遣いを見馴れた目には興味深い。
続いては相模人形芝居前鳥座による「艶容女舞衣・酒屋の段」の上演だ。前鳥座は他イベントで何回も拝見している。こちらは三人遣いのベテラン団体だ。さすがに、人形の複雑な動きも堂に入っている。

第四幕は再び湘南座の登場となった。今回の大会は湘南座結成三十周年記念公演も兼ねているので、一幕多く見学できた。内容は「義経千本桜」。静御前と忠信が桜満開の吉野で舞う。桃色の鮮やかな背景が美しい。三十周年を記念する華やかな舞台だった。
湘南座はまだまだ若い存在だが、平成



入野囃子



湘南座「義経千本桜」

から令和の現代に団体を維持することは、苦勞も多かったのではないかと思う。これから四十年、五十年と活躍して行って



田村ばやし

こうして、ひらつか民俗芸能まつりは終了したが、今思うと、十一月はタイミングも良かったのかもしれない。この後、感染者数が増大し第三波が来襲してしまった。十二月や一月だったら開催も危うかったような気がする。
ただ、ホールを利用したイベントなら、細心の注意を払えば、クラスターなど発生せず、十分に開催できるのではないかと、というのがこの大会を見学しての感想だ。

欲しい。
人形芝居が終了すると、入野囃子と田村ばやしの二団体が登場した。祭りに行けば当たり前のように聞いている祭囃子もコロナの今年は久しぶりであった。囃子方はソーシャルディスタンスを保つように間隔を空けて立ち、残念ながら神楽は登場しなかったが、それでも賑やかな囃子を聞かせてくれた。

また、イベント開催に際し、流行りのテレワークではないが、ネットを活用するのも一つだと思う。

その、一例を挙げると、筆者が日頃懇意にして頂いている、埼玉県白岡市の獅子博物館では、北は青森から南は沖縄まで八団体の獅子舞を、YouTubeを利用して生中継で配信した。これなら現地からの実演風景を、画面を通して見る事が出来る。

実は、獅子博物館では例年、地元白岡市で全国獅子舞フェスティバルを開催してきたが、御多分にもれず、令和二年は開催が困難になってしまった。

そこで、二〇二〇年大会を中止としないために考え付いたのが、ネットを活用した全国生中継ということだ。ただ、率直な感想として、パソコンの画面ではどうしても臨場感に欠けてしまうがやむを得まい。

むしろ、多くのイベントが中止となった中、このような企画を実行した獅子博物館と中継に応じた八団体に敬意を表したい。

こうして見ると、公演は取り組み次第で何とかなるように思う。大勢の人が押し寄せる祭礼の場と異なり、施設やネットなら管理もしやすく、しっかりと感染対策をすれば開催は可能だろう。

民俗芸能は人前で演じてこそ価値がある。令和二年は、あらゆる催事が中止されたが、この拙文が印刷される頃ほどのようになっていくか。まったく見当もつかないが、特筆するような世の中になっていないことを期待したい。

平成三十年度 新規加入団体会員紹介

海南神社

神奈川県三浦市にある神社で、天正五年（九八二）現地に創建です。拝殿は昭和二十三年に神奈川県の有形文化財（建造物）に指定されています。ご祭神は藤原資盈公や盈渡姫などを祀り、源頼朝が植えた大銀杏のご神木が龍神の形をしております。

当神社に伝わる面神楽の保存会は、本協会の団体会員です。

※平成三十年六月に加入された海南神社について、機関誌八十三号で未掲載でした。謹んでお詫びをし、本号でご紹介するものです。



海南神社

令和二年度事業報告

I 事業の実施等

1 普及事業

(1) 表彰

ア 令和二年度表彰の実施 二十人
総会が書面議決となったため被表彰者へ送付

(2) 民俗芸能大会等の共催

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止となった。

ア 第四十四回相模ささら踊り大会

・期日 令和二年七月二日（木）

・場所 海老名運動公園総合体育館
大体育室

・主催 相模ささら踊り連合会

(3) 民俗芸能大会等の後援

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止となった。

ア あつぎひがし座 第四十六回
人形浄瑠璃自主公演

・期日 令和二年六月七日（日）

・場所 厚木市文化会館小ホール

・主催 あつぎひがし座

イ 第十八回厚木市郷土芸能まつり

(ア) 郷土芸能発表会

・期日 令和二年十一月十五日（日）

・場所 厚木市文化会館小ホール

・主催 厚木市教育委員会

(イ) 相模人形芝居特別公演

・期日 令和二年十一月八日（日）

・場所 厚木市文化会館小ホール

・主催 厚木市教育委員会

ウ 令和元年度小田原民俗芸能保存協会後継者育成発表会

・期日 令和二年十一月八日（日）

・場所 小田原市民会館大ホール

・主催 小田原民俗芸能保存協会

エ 第四十八回相模人形芝居大会

・期日 令和三年二月十四日（日）

・場所 平塚市中央公民館

・主催 相模人形芝居連合会

2 機関誌の刊行

機関誌『かながわの民俗芸能』
第八十五号の刊行

3 啓発事業

(1) 民俗芸能情報の提供
(二ヶ月毎に年四回発行)

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため休刊した。

・令和二年七月～九月号 休刊

・令和二年十月～十二月号 休刊

・令和三年一月～三月号 休刊

・令和三年四月～六月号 休刊

(2) 二〇二〇さらめくふるさとかながわ
民俗芸能祭の開催

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止した。

・期日 令和二年十二月六日（日）

・場所 はまぎんホールヴィアマール

・出演 長井町館屋踊（横須賀市）

・前鳥雛子と里神楽（平塚市）

・柳島大漁船上げ唄（茅ヶ崎市）

・海南神社夏祭りの行道（お練り）

・獅子（三浦市）

・人形浄瑠璃（厚木市）

・主催 神奈川県民俗芸能保存協会

(3) 神奈川県教育委員会文化遺産課との
意見交換会

・期日 令和二年十一月十九日（木）

- 4 場所 県民センター（横浜市）
 新型コロナウイルス感染症 緊急アンケート
 調査の実施

・期間 令和二年七月二十五日～
 九月十四日

・対象 本会加盟八十八団体
 ・方法 アンケート用紙郵送による
 質問と回答

・回収率 六十二・五％（五十五団
 体から回答あり）
 ・結果 『かながの民俗芸能』
 第八十五号に掲載

II 会議の開催

1 総会

※新型コロナウイルス感染拡大防止
 のため書面議決により行った。

・期日 令和二年六月七日（日）
 ・場所 神奈川県立地球市民かなが
 わプラザ（あーすぷらざ）

2 理事・事務局会議

第一回
 ・期日 令和二年五月二十四日（日）
 ※メールによる会議

第二回

・期日 令和二年七月十九日（日）
 ・場所 アミューあつぎ（厚木市）

第三回

・期日 令和二年十月十七日（土）
 ・場所 アミューあつぎ（厚木市）

令和三年度事業予定

I 事業の実施等

1 普及事業

(1)表彰 令和三年度表彰の実施
 (2)民俗芸能大会等の共催・後援

2 機関誌の刊行

機関誌『かながわの民俗芸能』
 第八十六号の刊行

3 啓発事業

(1)民俗芸能情報の提供（三ヶ月毎に年
 四回発行）

・令和三年七月～九月号 六月発行
 ・令和三年十月～十二月号 九月発行
 ・令和四年一月～三月号 十二月発行
 ・令和四年四月～六月号 三月発行
 (2)二〇二一「きらめくふるさと」かなが
 わ民俗芸能祭の開催

II 会議の開催

1 総会

・期日 令和三年六月六日（日）
 ・場所 はまぎんホール ヴィアマール
 プラザ（あーすぷらざ）

2 理事・事務局会議 随時開催

賛助会員ご紹介（順不同敬称略）

鶴見神社
 金子 元重
 簡 照子
 佐々木和子
 樋口 和宏

会費の納付について

当協会の事業は、会員の皆様方の会費
 で運営されています。令和三年度の会費に
 つきましては、二月に芸能情報とともに郵
 送いたしました郵便局の払込取扱票にて
 納付をお願いいたします。なお令和二年
 度（それ以前も含む）未納分の納付につしま

しては、未使用の払込取扱票か次の銀行
 口座への振り込みでお願いいたします（利
 用銀行により別途手数料がかかります）。

会費（一口以上）

個人会員年額 一口 二、五〇〇円
 団体会員年額 一口 五、〇〇〇円
 学生会員年額 一口 一、〇〇〇円
 賛助会員年額 一口 五、〇〇〇円
 銀行振込 振込先 横浜銀行

県庁支店 普通 口座番号0811177
 口座名義 ミシヅク ゲイノウホヅンキョウカイ

事務局ボランティアスタッフ募集

神奈川県民俗芸能保存協会では、事務
 局の業務をお手伝いしてくださる方を募
 集しています。

○県内各地の民俗芸能情報の収集（年間
 四回で、自宅ですみます。）

○会員向け情報の印刷・発送作業（年間
 四回で、横浜の施設で行います。）

いずれかのお手伝いをしてくださる方
 は、協会事務局までご連絡ください。

「かながわの民俗芸能」第85号

令和3年3月31日発行

神奈川県民俗芸能保存協会

E-Mail kanagawa@minzokugeinou.com

発行 神奈川県民俗芸能保存協会

印刷 中川印刷株式会社

高久 子どもを供給することが難しいということですね。

茂木 第二次ベビーブームの子どもが今までやってくれていたけれど、それが細くなってきているんです。

高畑 うちの町内は未就学児が1名しかいないんです。それ以上は小学生になるまでいない。これは危機的なことです。

紙谷 みんな出ていっちゃうから、親と同居していることが少ないんです。

高畑 2019年までは綱渡りではあったもののなんとか続いていたのですが、今年（2020年）にやっけても役に穴が空く（人数が減る）という状況でした。

高久 この数年をどうするか、実はコロナの数年前から問題にはなっていたということですね。

高畑 学校に行ってお願ひすることも一案かとも考えています。

茂木 最後の頼みは学校ですけれど、学校単位で考えるとトラブルの元にもなるとも考えています。責任問題もありますし。できれば、学校の前に近隣町内とかにお願ひして、浦賀地域で若い衆なり年配の人なりに声を掛けていくのが、まずできることだと考えています。

他にも、町内会とか保存会ではなくて学校に全面的にお願ひして、町内会がサポートしていくというやり方もあると聞きます。

高久 それは大きな変化ですね。

茂木 文化財を残すための手段ですね。

高久 みなさん、いろいろな知恵が素晴らしいと思います。いつやめるかというタイミングを踏るのではなく、どうするか考えていらっしゃる。

高畑 もうやめようという話は一度も出ていませんね。

長島 細々でもやろうとしています（笑）

高久 今年中止のところで、「やらないと楽だったね」なんて笑い話も聞きます。

高畑 今年は楽でした（笑）。いつもどれだけ大変だったか。

高久 負担を感じないような形を考えるのも一つかもしれませんね。

紙谷 それは本当に難しいです。誰かが頑張らないとできないことですし。

高久 最後に伺いますが、来年の6月の予定は決まっているのでしょうか？

高畑 今の雰囲気では、役員の中ではできないんじゃないかという話が出ています。先程話したように、虎の三密をどう考えるか。避けようがない問題なので。

茂木 一人立ちの獅子舞だったらまだいいんです。二人立ち以上の獅子舞や虎舞でも中が離れていれば距離も保てますし、形態も風通しが良ければなんとかなります。ただ、うちの虎は着ぐるみタイプですから。

大昔は、今のような形態ではなかったという文献があります。昔は門付けをしていたので、門付けだと今のような着ぐるみタイプだとできませんから。どうやら、小さい舞台が移動していたらしいんです。それで昔の家だから平屋の屋根に乗って演じていたといひます。若い連中とは門付けを復活させたいなんて話もしています。

もし、この状況が今後もしばらく続くようならば、虎の形態を少し変えて三密を避けるようにするのも一案かもしれません。

高畑 奉行所が下田から移って今年で300年なんです。それと、為朝神社も創建200年なので、去年（2019年）の今頃は盛大にやろうと言う話でした。今年（2020年）できなかつたから、来年（2021年）やろうと話しているんですが、やはり再来年になるかとも考えています。今回は中止にするならば3月以前に決めざるをえないとも思っています。

高久 今年（2020年）できず、また来年（2021年）もできないとなると、子どもたちへの伝承も気になってきますね。

高畑 毎年平均3回演じるというローテーションでやっていますから、当然今年も、来年もそのつもりだったと思います。今年、まるまるとできなくてどういう変化があるかは心配ですね。

話が少し逸れますけれど、先月釜石から2021年2月に大会があるからリモートで出演してほしいという話があったんです。でも、リモート以前に練習ができない、虎の三密も避けられないということで、お断りしました。

リアルタイムだったら、ステージも用意しなくちゃいけないし。お断りした後公民館の館長に話したら、行政センターで練習できるようにするよって言うてくれたんですね。ただ、練習場所がここ以外ではできないでしょう。

紙谷 できないね。

高畑 学校なり仕事なりが終わってから集まれる時間と場所であることが必要なんです。練習場は地理的な問題と時間の制約があるから。

茂木 それに子どもたちの保護者が、今再開するよって言うても半分はやらないって言うと思います。強くこちらからは言えませんし。

高久 虎問題もありますが、練習場所、方法を工夫しないと難しいかもしれないですね。

高畑 ワクチンができるというニュースもあるから（2020年12月19日現在）、それがどうなるかにもよると思ひます。

高久 コロナ以前の問題、コロナの問題がある中で、じゃあ次はどうすればできるだろうと考えていらっしゃる。お話を聞いていてとても元気になりました。ありがとうございます。

高畑 町内に縁故の方です。今虎踊りに参加しているのは、町内会の者か、その縁故の者、唐子さんは友だちで、町内会と何かしら繋がりがある人達で構成されています。以前、三味線は外部の方をお願いしたこともありますが、なかなかうまくいかなくて。

茂木 虎踊りの囃子は笛がリードなので、浜町で三味線をずっと演奏していたおばあちゃんは笛に合わせて三味線がどこからでも入れるんですが、慣れてないとそれが難しいんですね。民俗芸能の三味線は、他の芸能の三味線とは少し違いがありました。

高畑 そんなこともあって、まったくの外部の方が入ることは慎重になっています。

高久 囃子の方たちも含めて15名いらして、お一人が歌ということですが、地域のなかで後継者を育てていきたいとお考えなのですね。

高畑 基本的にはそうです。ただ、趣味的要素だけなので指名して「やれ」とは言えません。

長島 歌は言葉が今の言葉じゃなくて難しいんです。だから、聞いただけで覚えられそうにないと言う人が多いんです。慣れちゃえばどうってことないんですけどね。

高久 三味線とか太鼓とか笛は、歌と違って自分の声を出さなくていいから、歌よりもやりたいという話を聞くことがあります。

長島 そうそう。

高畑 はっきりとした後継者がいないから育てていかななくてはならないのですけれど、長島さんが健在なので、真面目に考えていないところがありますね（笑）。

紙谷 そうだね。

長島 子どもたちに教えたこともあったんですけど、すぐに飽きちゃってうまくいきませんでしたね。笛のほうがいいわって（笑）。

紙谷 笛は3人います。いま、祭囃子は茂木さんがお師匠さんになって子どもたちに教えているんですけど、小学生の時は熱心でも、中学生になるとやらなくなってしまうことがあるんですよ。

長島 歌はいま1人でやっているから、1人でやるものだと思っているふしがあるんですよ。

紙谷 そうそう。でも昔は2人でやっていたしね。

高畑 親の代くらいは、50年くらい前は虎も複数人でやっていたんです。築川さんのお父さんもそうでしょう。

築川 母親は歌をやっていたよ。父親は会長をやっていましたよ。

高畑 今の私と同じ、役はやらずにバックヤード側ですね。

高久 でも、そのような役割がとても重要だと思います。交渉なども演者がやるのは大変なので。

茂木さんは祭囃子を教えていらっしゃるとのことですが、虎踊りの演者とは異なる人達が演奏されているんですか。

茂木 兼任者が多くですね。祭囃子を導入として虎踊りに誘うのも狙っていますが、練習は年間を通じて行なっています。

高久 今年は祭囃子の練習もできなかったのですか？

茂木 そうですね。ここの会館が使えなかったの。

高畑 今までの経過から考えると、会館でお囃子の稽古は、ディスタンスをとりながらできるよね。

茂木 他所とも連携をとって、すこし動き始めています。横浜市では緩和されてきて12月からは笛の演奏ができるようになりました。ただ、行政の動きが後追いですから、おそらくまた難しくなってくると思います（12月19日時点）。

祭囃子は練習をやっているところもあるんですけど、横須賀は高齢化していますし、虎踊りは年齢が上の方も関わっているし、そのあたりを考慮すると今はやるべきじゃないとも思います。

子どもが育たないことを心配はしているのですが、体さえ元気であれば。焦らず無理しないで考えていきたいです。本当だったら12月頃というのは、会長が目星をつけて、新しい子に声を掛けている時期なんです。伝承への焦りはありますが、民俗芸能離れはどこもあるの。

高久 今年中止されたことで今後の伝承への不安はありますか？

高畑 大ありですね。唐子さんができる子どもが10名いないんです。

茂木 囃子もそうですね。育てたくても子どもがいない。コロナ以前からの問題です。

高久 子どもたちは、町内会が数人ということは、外から来ているんですか？

長島 お友達が多いですね。高坂小学校の学区の子たちです。

高畑 小学生のメンバーで町内にいるのは3名位しかいないんです。あとは近隣に住んでいる子、あるいは町内におじいちゃんがいるという子もいます。

茂木 おじいちゃんが孫を連れてきたケースもあったんですが、だんだんと連れてこられる孫自体が少なくなっていますね。

高畑 困るのは、子虎と和藤内です。子虎はまだできるんですけど、和藤内は衣装が決まっていますから。今まで町内の子がやっていたのですが、今年はできないことがわかっていました。それで、目星をつけてお願いしていた子がいるんですけど、その子が来年大きくなっちゃったらまた新たに探さなくてはなりません。

去年は和藤内の真似をしているという子がいて、見込みあるぞって話がありました。

飯島 そうですね。そういう子も中にはいます。

高久 自分が経験して、その子どもに、孫に、という循環ができるといいですね。

飯島 おそらく、大人だけだと停滞してしまうと思います。6年生で卒業して、小さい子たちも入ってきて、そうやって循環しています。かつての青年団もそうだったように、年齢を区切ることで循環が生まれるのでしょうか。

高久 音頭さんはずっと同じ方なのですか？

飯島 そうですね。ただ、自分の年齢があがっているのでも若い人もいると思うのですが(笑)、もう少し新しい人も入ってくればいいですね。

高久 ちゃっきらこ保存会は、1月15日だけではなく舞台に出ることも多いように思います。2019年は、はまぎんホール「かながわ民俗芸能祭」にもご出演されていますよね。

飯島 ありがたいことに、お声掛けいただくことがあります。

高久 コロナ禍では舞台出演が叶わないことも多いと思いますが。

飯島 そうですね。舞台に出ることは子どもたちにとっても励みになるので、また落ち着いたら舞台にも出演したいです。

浦賀虎踊り保存会

期日・場所：2020年（令和2年）12月19日 横須賀市浜町町内会館

話し手：高畑昌弘さん(会長)、紙谷保さん(笛)、島啓子さん(唄)、筑川さん(町内会役員)、茂木鉄也さん(太鼓、笛)
(文中「高畑」「紙谷」「長島」「筑川」「茂木」)

コーディネーター：金子隆一さん

聞き手：高久舞さん（帝京大学文学部日本文化学科講師）(文中「高久」)

高久 2020年度の祭礼、虎踊りの中止はどのような段階で決定したのですか？

高畑 まず1年の流れをご説明しますと、虎踊りは6月の祭礼で奉納します。その後、市の民俗芸能大会が行われます。全団体が参加するのは2年に1度、文化会館で行なっていますが、文化会館で大会を行わない年も手を挙げた数団体のみが参加する小規模の大会が行われています。うちは毎年手を挙げています。また、それ以外にも1年に1回はホテルなどで呼ばれて出演することがあるので、年に3回は虎踊りを演じる機会があります。今年は祭礼以外すべて中止となってしまいました。

高久 祭礼はどの段階でどなたが中止と決めたのですか。

高畑 町内会の役員会で決定しました。町内会の役員は虎踊りの役員も同じなので、保存会で改めてと言うよりも、祭礼とセットで考えました。舞台を境内に作りますし、人手がかかります。お祭りではないと人が集まりませんので。

紙谷 コロナの自粛要請が出た3月半ば過ぎに決定したと思います。

高畑 うちの町会の祭礼は6月ですが、隣の町内会では一ヶ月前の5月に祭りがあります。祭りのときには互いに連携して協力しています。4月頭には協力をお願いしますし、横須賀市の民俗芸能協会などにも招待の関係があるから早めに伝えなくてはならないため、中止か否かの決定は3月にはしなくてはなりません。我々より先に隣の町内会では中止が決定しました。

紙谷 東京の三社祭が中止となって、隣の町内会も5月の祭りが中止したので、うちもできないだろうという話になりました。

高畑 それと、ちょうどこの時期に三密という話が出てきて。うちの虎踊りは三密が避けられないという話になったんです。囃子はまだいいとして、虎は着ぐるみタイプですから。

高久 確かにそうですね。人数は総勢どのくらいの数になるんですか？

高畑 総勢で付き添いも含めると48名くらいです。子どもがやる唐子さんが10名。昔はもう少し少なかったのですが、会場が広いところで演じることが多くて人数が多いほうが見栄えもいいたらうとなりました。囃子は15名、それに虎、大唐人、和藤内がいて、練習では親を含めてこの浜町町内会館に3、40名が集まることになってしまいます。

高久 本番というよりもお稽古が難しいということが中止を決定する際の理由の一つになったのでしょうか？

高畑 稽古よりも、やはり虎の問題が大きいです。二人一組ですし、完全に袋に入って、汗びっしょりになりますから。

高久 練習は年間を通して行なうのですか？

高畑 練習は祭りの1週間前からです。囃子は固定メンバーですから、何年もやっているのだからさっと合わせてできますが、子どもたちは毎年変わりますので練習が必要です。毎日通して何回も行ないます。

高久 唐子は小学生が中心ですか？

高畑 唐子は衣装が小学生サイズですから基本的には小学生です。ただし、1年生だと体力的にも厳しいし集団行動も難しいので、2年生から6年生です。

高久 三味線も町内の方なのですか？

型コロナをめぐる専門家の「解説」は色々です。まずは現状報告とさせていただきます。井上真弓さんのご協力に感謝申し上げます。

ちゃっきらこ保存会

期日・場所：2020年（令和2年）12月9日 三浦市役所

話し手：ちゃっきらこ保存会 事務局長 飯島 重一さん（文中「飯島」）

聞き手：高久舞さん（帝京大学文学部日本文化学科講師）（文中「高久」）

高久 2021年1月15日のちゃっきらこは中止となりましたけれど、中止になるまでの経緯を教えてください。

飯島 ちゃっきらこは、1月15日と日程が決まっているため、その日程を目指して来る人が多くいます。見学者を減らすために、別の日に開催しようという案もできました。しかし、最終的には中止という判断となりました。

高久 いつぐらいに決定したのですか？

飯島 決定したのは10月のことです。保存会で会議を行なった際に決定しました。保存会長、副会長、理事である音頭さん（歌手）らで話し合いました。

高久 2020年1月15日はまだ新型コロナウイルス感染症も世間を賑わせていませんでしたよね。その後はどんどん感染拡大していったわけですが、2020年度の行事でできなかったことなどはあったのでしょうか？

飯島 毎年、ちゃっきらこを卒業する6年生には3月の小学校卒業に合わせて感謝状を送っています。子どもたちが通う小学校の協力を得て行なっています。2月終わってから休校になってしまったので、それまでに渡せた子どもはいたものの、何人か感謝状を渡すことができませんでした。

それで、緊急事態宣言も解除された7月に仲崎会館に来てもらってやっと渡せました。感謝状を渡すようになってから、このような事態は初めてのことでした。

高久 練習はその仲崎会館で行なっているんですね？

飯島 練習は必ず1月7日から始めます。なので、2021年1月15日に向けての稽古はしていません。

高久 ほかの団体さんと、稽古ができずに奉納などを中止せざるを得なくなった話も聞きますが、ちゃっきらこ保存会の場合は稽古前に中止が決定したのですね。

飯島 仲崎会館は縦に長い建物で、子どもたちとお母さんたち、音頭さんたちが入るといっぱいになってしまいます。以前、1月7日から練習をはじめて15日の当日になって7名ほどインフルエンザにかかって、急遽当日だけ出演することができなくなったことがありました。広い会館ではないので、インフルエンザが、気が付かないうちに蔓延してしまったのです。

その経験から今では会館に入る前にはかならず消毒をして、マスクをして、換気をしながら練習しています。

感染対策をすでにやっている中で、これ以上の対策はできず、それでもコロナになってしまったときにリスクを鑑みたことも、中止に至った理由の一つとなりました。

高久 コロナ以前から感染症の対策はされていたのですね。では、1月15日は神事も行わないのでしょうか？

飯島 本宮で行なう神事だけは、保存会会長ら幹部のみが集まります。でも、楽しいのは神事ではなくそれ以外のところでしょうか？民俗芸能や祭りは楽しんでやりたいと思っています。楽しくやりたいのに制約があるとなかなか楽しめません。皆が安心して練習も本番も迎えたいとも考えました。

高久 おっしゃる通りですね。以前にお話を伺った時、6年生の数が多かったと聞きました。2020年で6年生が卒業して現状どうなのでしょう？

飯島 今、一番上は5年生です。2021年は元々6年生がいない状況で行なう予定だったんです。

高久 最後の年がコロナでできなくて卒業するという子はいないということで、ちょっとほっとしますね。でも、今回中止して練習も行わないことで次に入る子たちが1年空いてしまいますよね。

飯島 今年入りたいという子が何人かいたので、その点は残念です。ただ、やはり子どもが中心の民俗芸能なので、現状では無理はできないと考えています。

高久 入りたいという子は自然と出てくるものなのでしょう？

飯島 自らやりたいという子もいますし、こちらから声を掛けることもあります。音頭さんのお孫さんとかが入ることも多いです。

高久 少子化の問題でどこの団体さんも入る人が減っていて次への伝承に困っているという話も聞きますが、ちゃっきらこ保存会ではいかがですか？

飯島 やはり少子化はあります。マックスで30名いたときからは減ってきています。

高久 何歳ぐらいから入れるのですか？

飯島 幼稚園ぐらいですね。4、5歳ぐらいからです。

高久 子どもの頃に経験して、自分の子どもにやらせたいという親もいるのでは？

斉藤 2019年（平成31年、令和元年）から2020年のはじめにかけての長谷座の公演実績をご提供いただきましたので、そのまま紹介させていただきます。南毛利小学校公演後は、コロナ感染で予定されていたものがすべて中止になりますから、公演と稽古という根幹の活動が失われてしまいました。

2019年～2020年の長谷座公演日誌（場所と演目一覧）

- 4月14日 堰神社祭礼・三番叟、傾城阿波の鳴門（巡礼歌の段）
- 6月18日 南毛利保育所・傾城阿波の鳴門（巡礼歌の段）○
- 8月27日 くれよん保育室・傾城阿波の鳴門（巡礼歌の段）○
- 9月7日 南毛利公民館・寿式三番叟、団子売り○
- 9月18日 もみじ保育園・傾城阿波の鳴門（巡礼歌の段）○
- 9月29日 老人ホーム・傾城阿波の鳴門（巡礼歌の段）
- 10月16日 愛歩保育園・傾城阿波の鳴門（巡礼歌の段）○
- 10月19日 松蔭大学・寿式三番叟、団子売り
- 11月10日 厚木市郷土芸能まつり・傾城阿波の鳴門（十郎兵衛住家の段）
- 11月15日 依知南公民館・傾城阿波の鳴門（巡礼歌の段）○
- 12月7日 あつぎ郷土博物館・寿式三番叟、団子売り○
- 12月11日 清水小学校・傾城阿波の鳴門（巡礼歌の段）○
- 1月15日 玉川保育所・傾城阿波の鳴門（巡礼歌の段）○
- 1月17日 飯山小学校・傾城阿波の鳴門（巡礼歌の段）○
- 1月30日 有馬高校・傾城阿波の鳴門（巡礼歌の段）
- 2月11日 相模人形芝居大会・傾城阿波の鳴門（十郎兵衛住家の段）
- 2月21日 南毛利小学校・傾城阿波の鳴門（巡礼歌の段）○

* * * * *

井上 少し詳しく説明しますと、○印を末尾に付した公演は、厚木市が主催している郷土芸能普及公演となっています。松蔭大学の企画は、人形制作及び操作体験という内容を持ち、全11回にわたって行うものですから、私どもとしてはこの企画がコロナで失われるのは、かなりショックです。また、市内の保育園、小学校などをめぐる、12回の公演も私たちの活動を支えてくれる機会なので、いつか戻って欲しいです。

老人ホーム公演というのは、老人ホーム・ベストライフ本厚木での開催です。郷土芸能まつりは、文化会館小ホールでの開催、有馬高校の企画は、相模人形芝居学校交流ワークショップ公演という名前が付いており、公演と体験学習が組み合わせになっています。相模人形芝居大会は、県立青少年センターでの公演で、県内に伝わる人形芝居、五座が集まって開催しています。市民協働提案事業、という事業で3月1日に予定されていた公演、そして3月8日に予定されていた南毛利公民館まつりでの公演は、コロナの感染拡大防止の事情で中止になってしまいました。

公演活動はコロナ感染事情もあるので、中止となりましたが、今後は工夫して、そして感染対策を講じて、新しい方法での稽古が続けていければ、と考えています。

斉藤 以前に4つの質問を用意させていただき、座員さんのお気持ちを伺ってみたいと私から井上さんにお願ひしました。皆さんの思いですが、〈長期間にわたって稽古中断、舞台もない状態〉にどのような声が届いていますか。

井上 ①やはり、あまり長いと忘れてしまいそうで、怖い。②納得して、早く再開することを祈っている。③長いと感じているが、稽古は何を持ってOKとするか分からない。④長いと思うが状況が変わっていないので納得している。⑤さすがに長いと感じている。そうした回答ですね。

斉藤 それから、〈生きがい喪失〉みたいな感覚が座員の方にもあるかもしれないと想像していますが、いかがでしたか。

井上 その質問については、①つまらないというか、早く人形を遣いたい。②特にない。③感じます。早く公演、稽古がしたい。④はやくコロナが収束することを祈っています。⑤手持ち無沙汰を感じます。というような回答です。

斉藤 しばらく会っていない座員さん同士ですがどのようなお気持ちになっているのでしょうか。中断中の〈座員同士のコミュニケーション〉ですね。

井上 ①ラインで一応、繋がっておりますが。②やはり、皆さんと会わないと寂しい。③ストレス解消の場がない。はやく稽古がしたい。④座員の皆さんが元気かどうか心配である。というような回答ですね。

斉藤 それから、〈稽古中断中の自主稽古〉の様子ですが、いかがですか。

井上 ①あまりしていませんが、DVDを見たりしている。②今までの演目をビデオで見ながら、稽古しています。③ビデオを見る程度。たまにやってみたがブランクが心配です。④やっていない。そのような回答でした。

斉藤 稽古、舞台が戻ってくることを待つ座員さんの気持ちがよく伝わる回答です。新型コロナ収束に数年かかる、ワクチン開発・接種が始まれば安心とかインフルエンザと同じようにウィルスは消えないが落ち着いていく、とか。新

井上 お芝居ですから覚えることがたくさんあります。出演を頼まれると、道具、衣装、小道具、それから舞台作りもあるので、かなり大変です。同時に、道具の保管、管理などの費用も必要なので、計画的に補助金を申請しています。

斉藤 人形芝居を伝えていくため、会員はどのぐらいいたら、という希望はありますか。

井上 最低でも15名、それが目標です。というのは、演目によっては、人形が5体でないとは出来ないのです。公演に出られる座員がどうしても、継承の点からも15名が必要、目標となっています。個人差もありますが、最低でも3年は稽古しないと、主遣いではできないので人形芝居の継承は大変です。

座長である鶴由が平成5年に亡くなりました。次の山口寛造座長が亡くなれば、平成13年に人形芝居に精通する古老が多く辞めていかれ、継承が本当に難しくなっていました。座として、危機感があって、指導者を探すことになり、八王子の西川古柳家元さんのところに指導をお願いすることになりました。平成17年から稽古をお願いしています。年間に、8回から10回ぐらいお願いしています。

斉藤 新型コロナの流行となって、活動が止まっています。

井上 そうですね、座員が稽古で「三密」を防ぐことは難しい、という意見がありますから、稽古は中断です。顔合わせしていないから、長谷座の活動ができない。「もういいか」という気分になってしまわないように、したい。稽古は、近くの南毛利学習支援センター、南毛利公民館、長谷の自治会館などで行うのですが、1回の稽古がほしい、5時間です。

斉藤 超長い稽古時間ですね。

井上 そうですね、月に2回の稽古、ですから一年に24回の稽古と公演前の稽古をやっています。それとは別に西川古柳先生から習う稽古があります。今年は、後継者育成の事業がありまして、なんと18名も応募があったので、座員獲得に希望を持っていたのですが、コロナのためにこの企画が中止となり、後継者問題は大打撃となっています。地元の長谷でも声かけをして座員獲得に力を入れていますが、これからどうしたらいいのか、という気持ちです。コロナで継承リスクが高まりました。地元の長谷でも、自治会から補助金が私どもに出してもらっているのですが、人形芝居への関心が下がる傾向にあります。人形芝居の道具は、長谷の自治会館の脇のところに倉庫があり、そこに収納していますが、コロナで稽古もできないので、道具類はそのままなので、確認しに行っています。稽古だけではなく、道具、衣装類の管理も負担になっています。10月になったら、稽古は出来ないけれど、距離をとってビデオで稽古したいと考えています。神奈川県内には人形芝居の保存会が5団体あります。このコロナ禍でも、稽古している団体もあると聞いて驚きました。

斉藤 ところで、公演先の一つに、神社での祭礼があります。

井上 昔ほど地元の堰神社で演じても見物人は多くありませんが、人が戻ってきた感じもあります。昔は、一晩に10演目も上演したそうです。

斉藤 やはり、芸能は現場、舞台という場所が大事ですね。例えば、人形芝居団体の公演開催決定とか、厚木市役所で公演開催決定とか、何か動きがないとこのままの状態ですか。

井上 コロナの状況は、日々変化していますから、どれかを判断基準にして、活動再開するのかが決めるのは難しいです。やはり、座員の感染リスクを背負っているから、周りよりも座員の思いが優先ですね。ただ、やってみましょう、というのは無理です。土曜日（10月17日）に学習支援センターで1時から3時まで座員の方々、6名と相談しました。しばらく稽古していないので、ウズウズしている感じで、様子を見ながらやってみましょう、ということでした。

今回は、ビデオ学習を実施しました。今年の2月の舞台ビデオと人形芝居の基本の動きを録画したビデオを見ました。この会場には大型画面が用意されているので、活用しました。これまで、お一人、お一人にビデオ録画したものを回覧していたのですが、それだと自分のお芝居を自分で判断していたわけですが、大勢で、公演ビデオを見ますと、新しい発見ポイントがあるのです。「あそこの動き、こう言っていたけれど、直ってないね」というような会話が一緒に見ていると生まれてくるのです。確かに、稽古のときもビデオを利用して、動きを見ていたのですが、その次の動き、次の場面について関心があって、ゆっくり、しっかりビデオを見ていなかったわけですが。稽古の合間にビデオを見ないで、ビデオ鑑賞に集中しているから、感想が出やすいわけですが。今度は11月21日にビデオ稽古を行うのですが今度はビデオ鑑賞だけでなく、人形芝居の道具を出して、立ち役の足遣いだけ稽古をしてみよう、ということになりました。三人遣いの稽古は三密になるから、無理ですが部分的な稽古はやってみよう、ということになりました。体温計（非接触型）、稽古をする部屋の換気をしっかりやって、手袋を用意して取り組もうと考えています。

斉藤 ビデオ稽古、やってよかったですね。

井上 思いのほか、よかったです。6月14日の長谷座の総会に13名が参加して、今回は6名が参加しました。座員の負担を一つ一つ確かめて、これまで5時間の稽古を、例えば3時間とか、短時間にします。無駄を省いて、意識を変えていくことですね。2月公演を最後に、舞台はありませんが、3月のはじめに、公演が予定されていたので、稽古は2月にやりましたが、それ以降、稽古はゼロ。今年も、同様の活動を予定していましたが、4月からもちろん活動はゼロの状態です。松蔭大学での人形芝居の体験教室も予定していましたが、5年間も大学と共同でやってきたので、中止になったのは残念ですね。今年の活動状況については、メモを送付しますので参考にしてください。

斉藤 長谷の人たちの関心度合いはいかがですか。

井上 色々な娯楽があるから、あまり興味を示さない人が多いのが現実です。長谷生まれの地元の人でも、知らない方がいます。この踊りの背景を知らない人たちが多くなっています。この踊りを伝えていく活動は、踊りを通して出来た人間関係です。踊りのとき必ず会員と会える、これが財産です。経済面では、会費と補助金があるので大丈夫です。とくに道具というものが無いので、費用もかからないので一年間ぐらいいは、活動がなくてもしのげると思います。とりあえず、皆さんと会いたいですね、でもね、という状態。顔見たくになりますよ。

斉藤 来年もコロナ禍が続いたらどう考えますか。

井上 来年もできなかつた、どうだろう。正直わからないです。踊りは簡単だから、体から抜けることはない。唄は個人的に稽古できます。あとは、会員の気持ちです。「もういいよ」ということになったら、危ない。こういう気分になることが心配です。先は読めないですね。来年の7月の第二木曜日に、ささら踊りの大会予定日が決まりました。同じささら踊りの仲間、8団体の大会です。継承団体の仲間があることは頼りになります。

相模人形芝居 長谷座

話し手: 相模人形芝居長谷座 副座長 井上真弓さん (文中「井上」)

聞き手: 斉藤修平さん (文教大学生生活科学研究所客員研究員)(文中「斉藤」)

※コロナ禍により電話等でのインタビューで行いました。

斉藤 井上真弓(昭和31年生)さんが、長谷座の人形芝居に関わることになった経緯を教えてください。

井上 私の父、会田鶴由(明治42年生)が19歳から人形芝居をはじめたと聞いております。そして、父が昭和46年になって、座長を引き継ぎました。そうしたことが縁になっています。さらに、鶴由の祖父も長谷座で活躍していた、ということも聞いています。現在、座長は鶴由の長女である山口熱子(昭和23年生)、私の姉です。その姉が体調を崩しているのが副座長の私が代行して、会計の鈴木好子さんと座の運営をしています。長谷座の会員は、平成5年までは、長谷の人たちだけで継承していましたが、今は厚木市内から会員を募集して、活動しています。今は、長谷以外からの座員割合が高くなっています。

斉藤 女性座長、山口熱子さんが最初ですか。

井上 座長は、父の鶴由から山口寛造さん、そして富田温子さん、そして山口熱子ですから、女性初の座長は富田さんです。富田さんのご都合により、座員の皆さんで相談して、山口にお願いとなりました。同じ山口姓ですが山口寛造さんと親戚関係ではありません。

斉藤 長谷の様子を伺います。

井上 長谷は農村。お米と野菜と果樹栽培で暮らしていた地域です。私が小さい頃は、だいたい100軒ぐらいの村だったようです。昭和28年、県指定になり、長谷の青年団の若い人たちが、この人形芝居を習ったそうです。若い方が覚えも早いのですからね。

斉藤 現在、何演目、上演できるのですか。また、一回の稽古が5時間ぐらいいと伺っていますが、かなり長い稽古時間ですね。

井上 16演目ほど、稽古しているので上演できます。5時間の稽古の中身ですが、まず集まってもらって、人形の準備からはじまります。手足や首をつける、「仕立て」という仕事があります。それから、基本の稽古があります。これはどの演目にあっても、必要とされる稽古。立ち役の稽古、女形の稽古を通していくのです。主遣い、足遣い、左遣いを通していくのですから時間がかかります。一度、休憩して、それから演目の稽古になっていきますから、稽古時間は5時間となっています。でも、6月に長谷座の総会をやってから、何もやっていません。冬になるとインフルエンザも心配になって来ます。人形遣いは、三人遣いですから、稽古は三密そのもの。今後も集まって稽古することは考えていません。来年の3月までは考えていません。このまま会わないで、モチベーションが維持できるかどうか。とにかく、ビデオ稽古を考えています。手指消毒は出来ても、三密は避けられないので、稽古は無理ですね。座員も若い人はリスクが少ないけれど、高齢者は稽古場への顔出しも難しい。座員の高齢率も高いので難しいです。

斉藤 人形遣いが密状態になることは、理解できます。鳴り物はどうですか。

井上 二人遣いの三番叟についてですが、太鼓と鼓と付け打ちの鳴り物がありますが、密の状態にはなりません。声を出すような科白もない、科白は遣い手だから。

斉藤 現在の年齢別の会員構成を教えてください。

井上 20代が2名、50代が3名、メインである60代が6名、70代が2名です。女性が圧倒的に多くて、男性は4名です。人形芝居は、歌舞伎と同じで男の芸能でしたが女性が中心になってきました。昔は、女性は手伝いをやってくれる、そのような役割でした。長谷座は、地域のどこかの特定の家が中心になってやってきた、というものじゃなくて、あくまでも長谷の人たちが皆さんで運営してきました。地元の人たちがもっと参加してもらいたい、と思っています。

斉藤 人形芝居は、伝承芸能としては引き継ぐものが多いから大変じゃないですか。

きな道具になると考えられます。

過去の大規模な感染症の災禍にあっても現在まで継続してきた庶民の民俗芸能を絶やすことのないよう、今回のアンケート調査の結果を次へのステップとして、本協会の力を一つにしてこの難局を乗り越えていかなければなりません。

保存団体へのインタビュー

アンケート調査と併せて、保存団体のうち4団体の方にインタビューを行い、現状を含めてご意見等を伺いました。ここでは、そのインタビューの内容をお知らせします。

長谷ささら踊り盆唄保存会

話し手：井上真弓さん（長谷ささら盆唄保存会会長）（文中「井上」）

聞き手：斉藤修平さん（文教大学生生活科学研究所客員研究員）（文中「斉藤」）

※コロナ禍により電話等でのインタビューで行いました。

斉藤 保存会が発足したのは、いつ頃ですか。また、発足の経緯について教えてください。

井上 昭和51年に発足しています。ただ、その前に引き継いできた組織があったのではなく、途絶えていたものでした。私の祖母、会田サト（明治14年生）が大正時代に風紀の点から禁止されていた盆唄を覚えていたことが契機になっています。サトは他所から嫁いできたのではなく、地元、長谷の生まれでした。人形芝居の座長をしていた、私の父である鶴由に永田衡吉さんから、ささら踊りの復活の話があり、保存会を設立することになった。その時、長谷の老人会、婦人会の人たちが20名ぐらい集ったそうです。私の父、鶴由（明治42年生）が設立に関わったそうです。踊りは、農閑期にやっていた。七夕からお盆にかけて、やっていた。昔は、そうした時が男女交際の場だったそうです。若い女性が踊り、男性は松明を持っていたそうです。浴衣、帯、襷、前掛けの格好で、今もやっているので、昔もそうであったと思います。道具は、びんささらと太鼓です。私自身は、平成5年に加入しています。その頃は参加する人が10名ぐらいで、踊りの輪が、丸くならない状態でしたが、20年ぐらい前から少しずつ増えてきて、現在は、22名の会員が継承しています。昔は、長谷の人たちだけで活動していたのですが、それだと根付くのが大変。今は、厚木市全体から参加してもらっています。長谷の人は、3名います。

斉藤 本家の長谷の人が少ないですね。長谷のささら踊りを厚木市民の有志が継承されているわけですね。

井上 私も、長谷には住んでいないのです。車で実家まで15分ぐらい、出来れば、会長役は地元の方に戻りたいのですが。

斉藤 どのような考えの人たちが集まっているのですか。

井上 郷土芸能という意識を持って取り組まれておられる方、楽しみで参加されている方もおられます。祖先から伝わるものを楽しくやっていきたい、という雰囲気は保存会にはあります。時代は令和だし、あまり文化財ということで縛られなくても良いように思います。私は、30代後半に加入したのですが、最初は「何、この踊り」という印象でした。やがて、続けていくと歌詞の意味や、踊りの意味もそれなりに理解できるようになりました。

斉藤 この保存会活動の楽しみ、目標はどのようなものですか。

井上 厚木市主催の芸能祭、普及公演、そしてささら踊りの連合大会に参加して、踊ることを目標にしています。そうした公演があるときになると、稽古をします。例えば、愛甲のささら踊りとの掛け合いなど、要請されますと、稽古の日数を増やします。私たちの踊りは舞台で評価されるのですが、「しっかりやりたいね」、という気持ちがありますから、稽古はしっかりやります。

斉藤 さて、新型コロナの影響ですが。

井上 まず、年3回の公演が中止になりました。また、時々、定例の3回の公演以外に、1回から2回ほど出演依頼がありますが、それも全くありません。会員は、公演前に久しぶりに会って稽古するというリズムがありますが、今年は舞台がないので、会うことがなくなりました。万一、公演の参加依頼があったとしても、お断りしようと考えていました。「コロナは姿が見えない」「感染したら一人じゃ済まない」「どうしても20名でやるものだから、稽古でも舞台でも密になる」という会員の声を伺って、活動を止めています。例年であれば地元の長谷の自治会館で午後から2時間ほどお稽古します。皆さんの顔を見たいのですが、何かあったら責任が取れない、という気持ちです。今年は、昨年秋から60歳代も前半の方を含め4名の方が入会されました。慣れていただくための稽古ができません。一番気がかりなのは、高齢者の会員のモチベーションが下がることです。舞台もない、従って稽古もない。今年度は会の運営については見通しがないですね。踊りそのものは、素朴な輪踊りで、踊っている人の後ろについていけば、楽に覚えられます。唄を歌う人が二人いますが、唄を覚えるのは少し時間がかかります。後継ということであれば、唄ですね。ビデオの記録もしてあります。

18 (コロナ禍の影響で、保存会を運営するための資金的困難(経済的困難)がすでに発生していますか)は、いない76.4%、いる18.2%で、意外に大きな開きがみられました。資金的困難の要因は、祭礼・催事などの中止や縮小により出演料や謝礼金の収入が途絶えたことが最も大きいといえます。また、会費徴収について活動が停止したため見送るとか、感染防止のため対面による徴収を取り止めた例もみられます。資金的な問題は、保存会(団体)のみではなく、関連する子供会などへの影響も生じています。資金の減少は、当面の運営資金の他に諸道具や衣装の補修・新調など将来的な資金調達にも不安を投げかけている様子が見えます。なお活動停止により収入が途絶えたが、支出も生じないため、資金的な困難は生じないという例もあります。

19 保存会活動をするにあたって、感染防止は大事ですが、三密による飛沫感染、道具共有による接触感染、などなど現時点で一番気をつけたいことは何ですか。

最も多くの回答が三密回避の対策をとることでした。そのための具体策として、練習・稽古では、検温・手洗い・手指消毒・マスク・フェイスシールドを着用し、会場はなるべく広い場所を確保し窓を開けて換気を行い、2mほどの間隔を保つようにしているという例が多数ありました。しかし、中にはどうしても数人で密接して演じることが避けられない場合もあり、対策に苦慮していることがうかがえます。また、面や笛などは使用しないという対策もとられています。道具使用後は必ず消毒が行われています。そして、このような制限された練習・稽古の中で、マスク着用での激しい動きによる体力の消耗や芸能に対する意欲・やる気をどう維持していくか、非常に不安であるという回答が寄せられています。

20 保存会を継続運営していくにあたって、行政から、どのような支援があればいいと考えていますか(例えば、財政的支援、人的支援、補助金申請作成の指導など)。

回答の大部分が行政に対して財政支援を訴えています。コロナ対策としてアルコールや検温器などの購入費用が求められています。また、人的支援として公演活動及び会場確保、補助金申請手続きなどの指導助言も求められています。その他、情報収集と発信が必要であり、そのために継続的なアンケート調査を求める意見もありました。

21 コロナが発生してから、宮司、僧侶、祭礼世話人さんなどと直接に相談したりしたことがありますか?



アンケート 2020年7月25日～9月14日 計55回答

21 (コロナが発生してから、宮司、僧侶、祭礼世話人さんなどと直接に相談したりしたことがありますか)は、ない52.7%、ある29.1%で、相談していない事例が相談している事例のおよそ2倍近くになっています。催事、祭礼などにおける寺院、神社、自治会などと保存会(団体)との関係は一様でないのかもしれませんが。

22 その他、何かありましたらお書きください。

練習・稽古での感染だけではなく、広範囲に会員が所在する場合の会場移動の際の感染や役員の電車通勤に伴う感染を心配する声も寄せられました。一方、コロナ禍のときにできることとして、普段はできない仲間への丁寧な支援活動を検討している例や過去の公演の上映会を計画しているとの回答もあります。疫病退散の祈りが出来ず心苦しいという苦渋の声や練習・稽古が中断される中で、芸に対する気持ちが薄れていくのではないかと不安の声もあります。保存会(団体)の強い団結が必要であり、行政との緊密な情報交換が求められるとの意見もありました。

まとめ

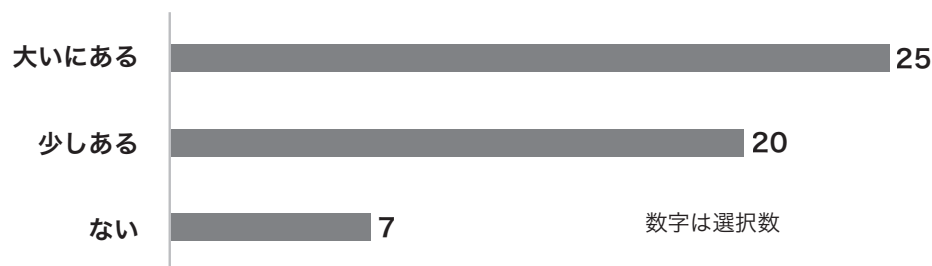
コロナ禍の中で、多くの保存会(団体)が長年引き継がれてきた催事、祭礼、行事などの中止を余儀なくされ、保存会(団体)の維持や芸の伝承にあたって厳しい状況におかれていることが明らかになりました。しかし、こうした状況のなかにあっても感染対策を講じながら伝承を継続するため、できる限りの練習・稽古を続けていることも報告されました。

また、保存会(団体)の多くが財政的困難に直面しており、行政を始め関係機関の継続的な支援が求められています。同時に今まで以上に機会あるごとに保存会(団体)からの声を聴き、交流を通して細やかな支援も必要とされています。

困難な状況は、人と人との団結を強め、災禍へ立ち向かう力を醸成します。このようなコロナ禍の中にあってこそ、保存会(団体)の団結、行政との連携強化を進め、現状に即した新たな活動を少しずつ展開していく必要があるのではないのでしょうか。例えば、対面を避け、新たなデジタルコンテンツによる情報発信などは、これからの継承を支える大

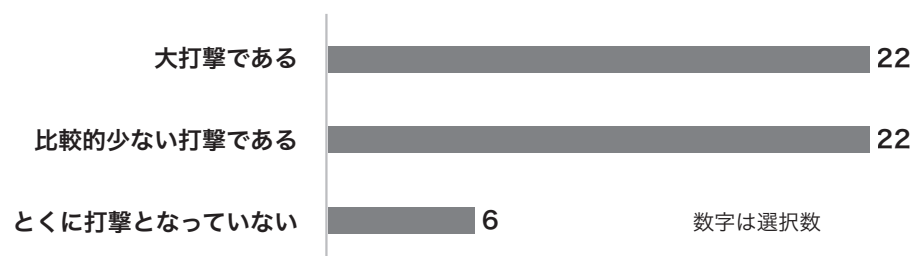
14 (コロナ禍によって、保存会長(代表)さん自身の心身に影響がありますか)は、大いにあるが16.4%、少しあるが30.9%、合わせると47.3%となり、およそ半数の方が程度の差はあるものの何らかの影響を受けているといえます。また、変わらないが41.8%で、影響あると変わらない(影響なし)が二分していることとなります。保存会長(代表)さんご自身の感じ方によるものですが、大いにある16.4%は13の相談する相手がいない12.7%に近い数字となっており、このような結果に反映されているのかもしれませんが。

15 保存会が伝える芸の伝承・継承について、コロナ禍は相当の影響がありますか？



アンケート 2020年7月25日～9月14日 計55回答

16 コロナ禍は保存会の活動にとってどの程度の打撃だと考えておりますか？



アンケート 2020年7月25日～9月14日 計55回答

15 (保存会が伝える芸の伝承・継承について、コロナ禍は相当の影響がありますか)は、大いにある45.5%、少しある36.4%、ない12.7%、また、16 (コロナ禍は保存会の活動にとってどの程度の打撃だと考えておりますか)は、大打撃40.0%、比較的少ない打撃40.0%、とくに打撃とはなっていないが10.9%です。大小合わせ影響があるは芸能伝承の影響が81.9%、活動の打撃が80.0%となり、多くの保存会(団体)に伝承のための活動に深刻な影響を及ぼしている状況が認められます。

17 インフルエンザの流行で、かつて、保存会の仲間が罹患したり、あるいは活動中に集団食中毒の経験はありましたか？



アンケート 2020年7月25日～9月14日 計55回答

17(インフルエンザの流行で、かつて、保存会の仲間が罹患したり、あるいは活動中に集団食中毒の経験はありましたか)は、ない87.3%、ある7.3%で、今回のコロナ禍はほとんどの保存会(団体)がかつて経験したことがない初めてのものといえます。そのため対策に苦慮している状況が分かります。

18 コロナ禍の影響で、保存会を運営するための資金的困難(経済的困難)がすでに発生していますか？



アンケート 2020年7月25日～9月14日 計55回答

ため、祭礼行事の中止に伴う影響を受けたことも考えられます。

5と同数で、**11**（今年の公演、奉納活動は、中止する予定である）が、56.4%です。9月5日最終の本アンケートの調査時点において、その時点までの公演・奉納活動の中止に加え、以降においても感染再拡大の傾向もうかがえることから、今年（今年度）の活動は中止せざるをえないと判断していることが分かります。

1（保存会として、すでにコロナ感染症対策を独自に実施している）が次で、52.7%です。三密を避けるため、互いに距離をとり、消毒を行うなど具体的な対策をとっています。**1**の選択数は、次の**6**（コロナ感染症の流行によって、保存会の稽古は、制限的だが、持続できている）の40.0%に反映されており、従来通りの練習・稽古ではないが、対策を講じてある程度持続できていることが分かります。ここで、**1**と**6**を選択している例は、活動が一時期に集中しない古典芸能や風流に多くみられます。しかし、**5**と重複している例が2例ありやや混乱している部分も認められます。

また、**3**（保存会として、すでに対策案を検討しはじめている）は32.7%、**1**の52.7%と合わせると85.4%となり、多くの団体が最も重要なこととして認識していることが分かります。

感染の流行による会員の異動動向については、**8**（コロナ感染症の流行によって、保存会の会員の新規入会者は増えていかない傾向にある）が18.2%、**7**（コロナ感染症の流行によって、保存会の会員が退会する傾向にある）が1.8%です。新規入会者の確保の問題は従前からの難しい課題であり、コロナ禍がさらに悪影響を及ぼしていることが考えられます。しかし、退会者は全くないといってよく、コロナ禍の中で会のまとまりが強化されたともいえるでしょう。

12～18・21は選択肢を設定した設問です。

12 保存会の会員仲間と交流、顔合わせの機会が減りましたか？



アンケート 2020年7月25日～9月14日 計55回答

13 コロナ禍の影響によって、保存会の現状に心配が出ていますか、どなたかに相談していますか？



アンケート 2020年7月25日～9月14日 計55回答

12（保存会の会員仲間と交流、顔合わせの機会が減りましたか）は、減ったが83.6%で、練習・稽古が中断していることから当然、交流の機会が減っています。変わらないが12.7%ですが、**6**の結果を勘案すれば制限的な練習・稽古の中でも交流が保たれているということでしょう。

13（コロナ禍の影響によって、保存会の現状に心配が出ていますか、どなたかに相談していますか）は、相談しているが43.6%ですが、相談する相手がないが12.7%あります。現状に不安を抱えながらも相談する相手がないという状況がみられます。

14 コロナ禍によって、保存会長（代表）さん自身の心身に影響がありますか？



アンケート 2020年7月25日～9月14日 計55回答

新型コロナウイルス感染症 緊急アンケート調査結果について

神奈川県下の民俗芸能団体がコロナ禍でどのような影響を受けているのか。その様相の一端を明らかにするために実施した、郵送による緊急アンケート調査の集計結果を次のとおり報告いたします。

実施対象団体は、神奈川県民俗芸能保存協会に所属する88団体の会員です。令和2年8月末日を締め切り日と設定して、7月25日に投函しました。その結果、9月14日時点で55団体から回答を頂き、回収率は62.5%となりました。

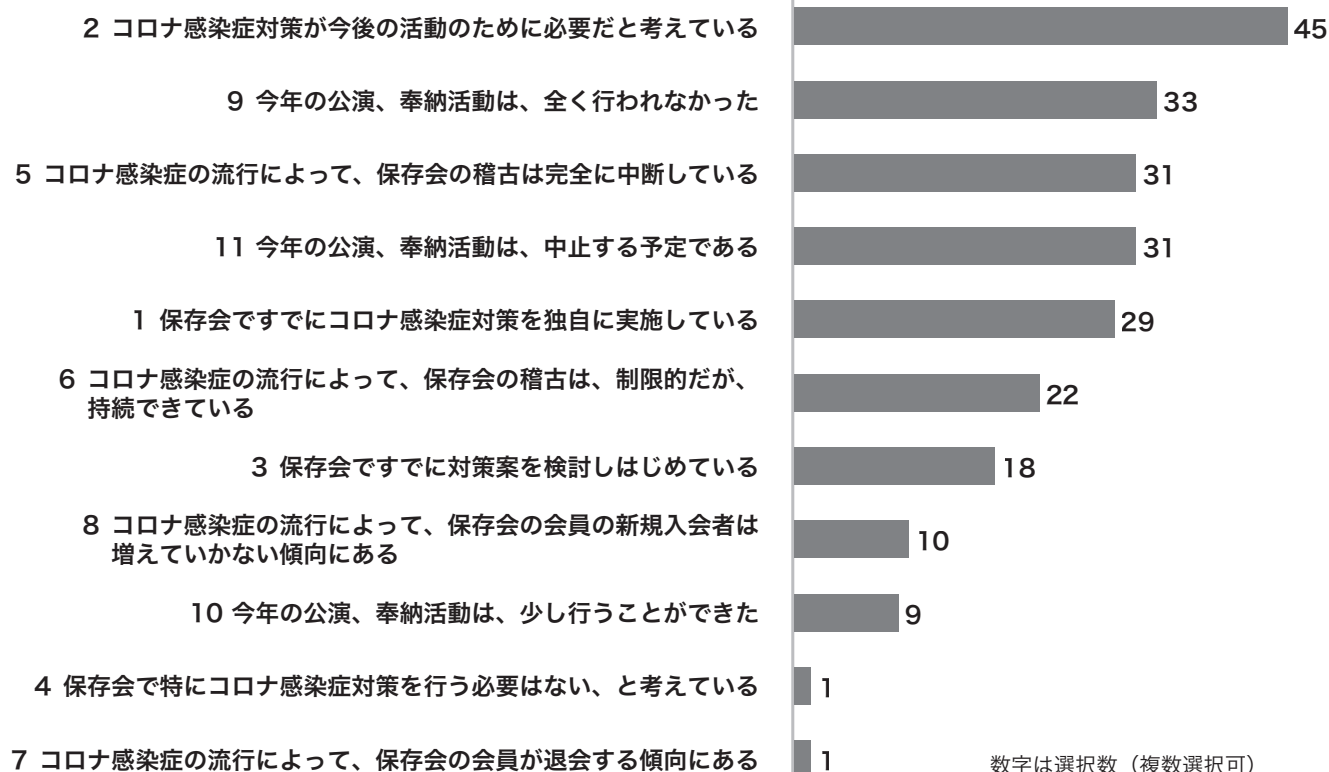
回答は9月30日に集計、整理して、10月17日開催の本協会理事会での協議、承認を得て報告したものです。調査結果はグラフ、要約及びコメントを付して示したものです。

ご回答いただきました会員各位には心からお礼を申し上げますとともに、本報告を参考に今後の活動に活かしていただければ幸いです。

神奈川県民俗芸能保存協会 会長 垣澤 勉

回答数： 55団体 団体数： 88団体 回答率： 62.5% アンケート調査期間 2020年7月25日～9月14日

1～11は、回答者が該当すると思われる項目を選択するものです。(選択数の多い順に並べています)



アンケート 2020年7月25日～9月14日 計55回答

選択数の多い順にみていくと、**2**（保存会として、コロナ感染症対策が今後の活動のためにも必要だと考えている）が最も多く、81.8%です。コロナ感染症対策が今後の活動に必須であるとの回答ですが、これは現在の状況から至極当然の結果であるといえるでしょう。これに対し**4**（保存会として、特にコロナ感染症対策を行う必要はないと考えている）が1.8%ですが、催事が数年に一度の開催であるということから、現況の中であえて練習をしなくても済むという特殊な事情によるものでしょう。

次に選択数が多いのが**9**（今年の公演、奉納活動は、全く行われなかった）で、60.0%です。神楽、夏祭り、風流、獅子舞、古典芸能などのすべての芸能に共通しています。特に芸能が附祭となる祭礼の中止や密閉空間を伴う芸能大会などが軒並み中止となったためとみられますが、感染拡大防止の観点から保存会（団体）が自ら止むを得ず公演を中止したケースもあったようです。しかし、**10**（今年の公演、奉納活動は、少し行うことができた）が16.4%で、感染流行の前の開催だったのでしょか。

9に続いて**5**（コロナ感染症の流行によって、保存会の稽古は完全に中断している）が56.4%です。保存会（団体）では、日頃から練習・稽古を行っておりますが、夏祭りの芸能、神楽、獅子舞などは祭礼行事に伴い集中的に行う傾向がある